

右等の事實から推せば、透視の原動力は複雑なもので、その中には、心霊の遊離作用なるものが認められる。又某透視者の自白したところによると、該透視者は、自己の力によつて透視するのではなく、その人の嚮導靈コントロール即ち後見役ゴウケンヤクをする亡霊が影身に添ふてゐて、耳もとで問題の解答を教へてくれるから、透視者は其言葉を自分の意識に生じたものらしく装ふのである。

二三年前に著者は、島根縣簸川郡鹽冶村の友人方へ宿泊の折り、主人夫婦が珍物を馳走するとして、三十五六歳の壯漢を連れて來て引合はして呉れた。此壯漢は近隣に住む藤原繁太郎なる農業者であるが、恐ろしい眼つきで初對面の人の顔を凝視する癖がある。著者は甚だ變へんに思つたので、問ふて見ると、人相で其人の事を何事でも、百發百中に言當てるので、一ケ年に三四千人の觀相依賴者があるのださうな。

主人は彼をして著者を觀相すべく命じた。著者は彼と雜話中、その凝視の矢面に立ち、勝手に眺めさせた。前後約二時間に及ぶ間、何十度となく彼れの鋭い凝視を受

けたけれど、著者の性質や身柄に關する重要事や運命などには何事も語り得ないで、漸くのことに、目下の家業は普通人の爲し得ない性質のものたること、及び、戸籍名は讀み難い名であるべしとの二事を言ひ得て稍的中を見たるのみであつた。而して遂に彼は兜かぶとを脱いで曰く、貴下のやうにわからない人は、千人に一人あるか無しで、どうしても觀みへない。全身に針を立てるほどの間隙が無い人ですからと言つたので、滿座洪笑に及んだが、著者は彼れの言葉によつて、此人の觀察力の種を看取し得たのである。

著者曰く、貴君の觀相力なるものは、貴君自身には或は知覺しないで居るかも知れぬが、貴君を保護しつゝある靈がある、多分祖先の一人又は父か祖父あたりの身近い靈魂が、貴君の心耳に告げ知らすところであらうと詰つたら、此人首肯しゅくわんして曰く、左様仰有る以上は實を申すべし、予は四才の幼少に父に死別したれば、父の顔は知らぬけれど、數年前に不思議な夢を見た。その夢は、一人の見知らぬ男が、自分は

そちに縁ちなみのあるものである。自今人事くわんに關してわからぬことは何事でも知らせてやるからと言つてくれたが、その男は何となく自己の亡父であらうと想はれてならなかつた。爾來他人の容貌を觀て居ると、是れは斯く／＼と云ふて聞かす聲が耳の根に聞こえるので、それを自己の言葉に燒直して言ふに過ぎぬと云ふことを告白した。世間に透視者とか豫言者とか謂はれる人には、屹キツト度この種の人キツトが少くないことと信ずる。また彼の催眠術にかゝつた人の口から、さまざまな透視または遠感的の言葉が出るが、それも憑宿した靈の加勢するところも無いには限らぬ。透視の原動力が、自己の心靈力にせよ又憑宿した心靈力にせよ、その語義からせば現實の事物を對象とせねばならぬのに、未來又は、過去の事實にして、世の何人にも知れて居ないことを觀取すると云ふことは、科學的に於ては、あり得べからざることである、にも拘らずその事が在るのである。

事 例

(A) 東京郊外中野町に石坂ヤチなる越後生れの老媪があつて透視能力が強固である。本年四月末、東京の新派俳優のYが京城の興行師から招聘されたので、出發前にその成行き如何んを透視してもらひに行つたところ、透視して曰く、京城では大當りだけれど、銀かねは約束通り手に入らぬ。また京城に居る内に北方からも招くけれど、夫には應じないのがよい。又朝鮮へ着船のときの模様が見えるが、三人連れで下船し、トランク三個携帶してゐる云々と。Yはこの透視を疑つた。何故なれば京城へは父子二人で行き、トランクは二個携帶の準備をしてゐたからである。然るに愈よ出發の日に荷物の加減で、急にトランク一個を買足して乗船した。而して船が五月一日に釜山に着くと、京城から迎ひが一人船室へ來てくれたので、棧橋へかゝるときは三人連れであつた。夫から京城の興行は當つたけれど、銀は約束の六分餘りしか貰へなかつた。また安東縣から招かれたので、悉く的中をしたが、安東縣へは透視者の言を遵まもつて招聘を謝絶した。この千里眼老媪は、先年桂侯の病氣を透

視して、この人は死病で來月は逝去すると言當てたので名を出した媼さんである。

(B) 先年静岡市に桑原俊郎と云ふ催眠術の巧みな人が、十三才の下婢を催眠させて透視能力の試験を行ひ、さまざまの好成績を挙げた中に他家の營業上のことに關して珍奇な答へを出したことがある。或る夜氏方の近所の前田と云ふ酒造家が來訪した際、沼津にある同家支店の此月に入つての酒の卸賣上の數を透視せしめたところ、初めは「支配人が東京へ行つて不在で判らぬ」と答へたので、支配人は不在でも、賣れ行きがあるなら判らぬ筈が無い、モウ一度見て來いと命じた。スルと「判りました巻紙と筆とを下さい書きます」と言つたので、それを與へると、催眠のまま「樽で二十六本賣りました」と書いた。前田等一同奇異に思ひ、首を捻るもあれば、笑ふものもあつた。前田は即夜沼津の支店へ眞偽問合せの書面を出すと、翌日午後支店から返事があつて「催眠術とかにて御調らべの由にて酒賣上高報告すべき様御申越拜承、實は當店にて今日までまだ一度も取調べたる事無く、御照會にて早

速調査せしに、正に二十六本に相違無之候」と返書を送り來た。

(C) 大正五年、透視者三田某が鳥取縣倉吉町で透視の公開實演をしたとき、同地の中學校教諭が、洋服のポケットから一個の五拾錢銀貨を握り出して何物なりやと問ふたら、明治十四年製造の二錢銅貨だと答へ、教諭は相違せりとてその手から出して見たら、自己の間違ひにて、透視されたところが確實であつた。又その頃松江中學で木箱の中の繭を透視せしめしに、蝶だと答へて生徒等から失敗を嗤笑せられたが、透視者は全く繭の内部の蝶を視たのであつた。

(D) 一八八五年の八月、北米の新英蘭ニューイングランドの東海岸にあるシリア・サクスター夫人の別荘に奇妙な現象が起つた。尤も此別荘では、交靈術だのコツクリなどだのが再三行はれる家であつた。或る夜この家にハーバード大學教授ジョン・ケー・ペーン、牧師ヘツプウオース、名高いジュリアス・アイヒベルクなど六七人が集つて靈象上の議論をして居た折り、不意にP夫人が「あれマア！^{ヘッ}室の壁が無くなつて、濱邊と海

が見へて来て、其所には月が晝のやうに照らしてゐます」と叫んだ。人々は急に静寂になつて、なるべく詳しく見て話すやうに頼んだ。

スルド夫人は「益々奇妙になります。長い街道が見えて兩側に楊のやうな木が生へて居り、月が照らして街路に黒い影を落してゐます、アレ、木の蔭に隠れて、道の真中に一人の男が立つて居りますが、少しづつ歩いて近づきます、あらジャーマンさんだ」と叫ぶ。此ジャーマンは九ヶ月前に死去した牧師である。

次でド夫人は「ジャーマンさんは微笑して私を見て後返へりして元の木蔭へ這入て仕舞ひました。向ふの方から又一人誰か来るのが見えます、白い馬に乗つて頭を垂れて静かに歩ませて、帽子の縁が垂れて居るので顔が能く見えません、あれ！牧師さんが木蔭から月光の中へ飛び出したら、馬は急に立寄り逸込をしてグル／＼廻り元來た道へ往きます、馬上の人は夫を引き止めて頻りに鞭を入れます、馬は牧師さんを怖がつて後しがり許り、乗り手は馬から下りて、何故馬が驚いたかと頻りに四邊

を見廻はし馬の口を取つて引ツ張ります、漸く顔が見えて來ます。牧師さんはその男の方へ進んで行きます馬は夫を見て益々荒れ狂ひますので男は力を極めて馬を静めようとして居ます。牧師さんは其男の側へ行きました、漸く男は牧師さんの姿を見つきましたが、大層驚いてタチ／＼と後退りをします牧師さんは夫を追はないで、只手を舉げて男を指して居ます。オヤ男は急に馬に乗つて鞭を呉れ乍ら一散に元來た方へ飛び出しました。牧師さんは再び微笑をして居ます、アラモウ何も見えなくなりました」と言つた。

此物語りは一座の人々に非常なる興味を與へて、夫からその奇怪な幻影の意味に就て討論が始まつたが、結局とりとめた説明は無かつた。其翌年二月初旬十人ばかりの客人がポストン郊外の或る貴女の家へ晩饗に招かれ、食事後に一同が二階へ往つてコーヒの御馳走になつた。此日一尺計りの積雪があつたが、夜は風いで静かな晩であつた、お客の中には前年の八月にサクスター夫人の別荘に居た者が二人程居

り、その一人はP夫人であつた。

P夫人は入口の扉の側に座して、右側の張り出しの上なる日本製の花瓶に猫柳が挿してあるのを眺めて、今の季節には珍しい物ですと賞めると、主人の貴女が、昨日散歩に出た折りジャマイカ街道の路傍にあつたのを見つけて御者に折らせて持ち帰つたのだと答へた。その時一同の眼は悉く花瓶へ集められたが、不思議やその刹那に柳は消え失せて花瓶ばかり淋しげに残つた。

その時反對の側の張出しにある花瓶の方で、サラ／＼と言ふ音が聞こえたので、一同吃驚してその方を見ると、今の今まで何も挿されて居なかつた花瓶に、今も見えなくなつた猫柳が挿しこまれてあるではないか。此花瓶は人々から二間以上も離れて居るから、花瓶へ手を届かせることは絶対に出来ないことだ。併し此家は是迄數度色々な不思議なことが現出した経験があるので、客人は別に驚きもしないで寧ろ面白く感じ之が話題に上つて賑はつた。

エフ醫師の實驗

英國のヂェルハムの一坑夫の妻のジェーンを多年實驗して居た醫師

エフ氏が、或る日少しく離れて居る村の患者と相談をして實驗の日を定め、その夜八時から十時までの間に一室に臥さしめ、夫を催眠させたジェーンに言ひ當てさせるのであつたが、無論ジェーンには豫め何事をも告げないのだ。

さて實驗日の夜、エフ氏はジェーンに催眠させてから、實驗者の居る家を告げ、今患者が如何して居るかを見よと命令した。ジェーンは直ちに患者の家の模様を詳細に間違ひなく語つた後、患者の部屋の戸の開いてあることを語つてから、非常な驚きの音調で『そこに居るのは人間ですか』と叫んだ。

エフ氏は、然り人間であるが瘦せてゐるか肥へてゐるかど訊ねたら『非常に肥つてゐて脚は義足だ』と答へた。然るに該患者は長の病氣のめに非常に瘦せて居るから、エフ氏は甚だ怪しく思ひ、それは見當違ひだ、患者は骨と皮とになつて居ると告げたところ、ジェーンは、甚く肥つて居ると主張し、殊に腹部の大きいことを主張し

て止まなかつた。

次にジエーンは、患者が卓子の傍に坐し、その傍らに新聞紙が置いてあり、又ブランデーと水とが置いてあると言つた。エフ氏は、夫はブランデーではなく葡萄酒ではないかと問ふたら、プランに相違ないと答へた。而して又彼女は「此部屋に一人の黒い髪の婦人が長椅子の上に横はつて居て食事を始め出した、併し肥つた紳士は何も食へない」と言つた。

エフ氏は「その紳士の頭に脳があるかどうだか」と訊ねたら、非常に考へ込んで「どうも何も見へない」と答へた、そこでエフ氏は、ジエーンの天眼通は患者の事だけは全く間違つてゐると思つた、而して翌朝エフ氏は患者を訪問したところ、患者は斯う言つた。

「自分は昨夜、自分の着衣を人間の形に拵へさせ、大きな枕をその胸中に押込んで腹を膨らませた後、人間の坐つてゐる如く卓子の傍に置き、又ブランデーと水と新聞

紙とを其脇に置いて自分は他の室で臥た」云々

ソコでエフ氏はジエーンの天眼通に驚いた。催眠にかゝつた人の透知能力を、一切施術者の心の遠感だと云ふ世の唯物論者は右の實驗を何と解釋する歟。

幽霊寫眞上の怪現象

幽霊には固有の光線があつて、寫眞の乾板に感光するものたることを知らずに、世の幽霊寫眞を信じない一般の科學者中で、近年極く少數のものが、漸く幽霊寫眞の事實たることを知つて異常に歎美に撲たれるのであるが、一方靈魂派の人々は、二十餘年前の昔しに既に幽霊寫眞上の超理學的怪現象に關し有力なる論文を發表して居

た。

一般の幽霊寫眞は、心靈像の姿勢が整つてゐないで、或は燒點にあつたり或は燒點を外づれたり、或は顔だけ現はれて居るが、横になつたり斜めになつたりして地球の引力には何等の關係がないもの、如くであり、或は光線が右から來るのに、心靈像は左から光線を受けたりすることがある。また幽霊を寄せる力のある靈媒者を撮影するに當り、その人を寫眞の主要部に在らしむるやうに鏡面内に位置を取つたる上で撮影をした場合にも、心靈像が寫眞の主要部を獨占して靈媒の姿を塗消し終るものもある。

知人兵藤仲藏氏の偶然獲得した幽霊寫眞を見ると、正面的に撮られた幽霊は背中に楕圓形の後光を有つて居るが、その後光は、寫眞面に並行せずして斜めになつて居る。然るにその幽霊の傍にある實體物は、悉く普通の寫眞現象の如くに、寫眞面に平面的に寫つて居る。

一般に幽霊寫眞は、光線や鏡面の理法を没脚した現象を能く伴つて居る。これらこそ全くの超科學現象とも稱すべきものであるが、是等は幽霊が、俗人の懷疑心を撲滅せしめる手段だと解する人もある位である。

神職夫人火を吐く

三重縣人の三上新五郎氏、この人は日露戰爭時代に、金澤師團管下に歩兵大尉で中隊長を奉職して居たが、天性の硬骨が累を爲して上官と衝突し、その爲め退役せざるを得なくなり、夫から皇典講究所へ入學して優等の成績にて卒業後、郷里の産土神社に社掌として奉職することになつたが、何故に氏が神に奉仕する身となつたかと

云ふと、軍隊に在る頃から、體に種々の靈的現象が起り、何の神とは知れないが、氏の身邊には常に或る神靈らしいスピリットが纏綿して居ると想はれたので、元來無双の敬神家であつたから、意を決して神職となるに至つたのである。

さて大正八年に、氏の夫人が死産を産み、同時に重病に臥したので、氏は死産の埋葬もしないで、病夫人の看護して居たが、夫人が嘔吐を催したので、延側へ這出させて、庭先へ嘔吐はかせると、吐き出された食物の中に一片の紫紺色の小塊物があつた。妙な物だと見るや否や、忽ち爆然猛烈に自焼し始めて二尺餘の火柱を立て乍ら容易に消滅をしない不思議さに、氏は自己の幻覺に非ずやと疑ひ、病夫人を顧みてお前の目にアノ火が見へるかと問ふて見ると、夫人は火を認めると答へた。

仍で氏は驚いて暫時、火を眺めて居るに、火は烈々として旺んに燃え續けるのであるから、遂に不安の念に驅られ、消火の手段を執る爲め、臺所へ走り行き、バケツに水を運んで来て見たら、彼の怪火は既に消滅して居り、紫紺色の小片物も痕跡を残こ

さすにあつた。

人の口から火になるものを吐くことは古來稀有な事實たるのみならず、其燃えたものの何物たるかも判明しない、實に不思議なことである。さて病夫人は夫から間合もなく精根盡きて永眠をしたのであるが、不思議は夫人ばかりの身の上でなく、夫人の産み落した死産にも亦世に見られない奇怪なことがある。

胎兒は死産されても皮膚が赤いのが通例であるが、三上夫人の産んだ死胎兒は、全身が煤黒くあつた。氏は夫人の屍體を棺に收めてから死産の死體も入棺させかけたが、如何にしても其奇怪な皮膚の色のまゝ埋葬する氣になれなかつたので、神に祈念をして見ると、靈驗忽ち顯はれ、さしにも黒かつた皮膚が、桃紅色に變つた。

(三上氏の實話)

人體中から火が出た記事が八百年前の文書たる「大二條殿日記」にもある、曰く、不思議の事は侍る、六條壬生に尼の死したるを引棄てたりけるを、犬來りて腹を一口喰ひ破りたりければ、腹の

海の妖獸牛鬼

石見國大田町字新市しんいちに中屋の政五郎と云ふ紺屋の手間をする人があつたが、魚釣りが道樂で、頃のよい季節には、毎晩のやうに、家から一里半ある静間村しづまの字魚津の海岸へ行いて、遠淺を涉り、島へ上つて綸いざを垂れるのが常業のやうであつた。

右の魚津と云ふところは、神代に大國主命の暫時住居をされたと云ふ大きな洞窟が海岸の絶壁にあるところで、人家と隔絶し、波の荒い日などには、風光雄大で神寂かみさびへられて居た。

た淋しい場所であるが、政五郎は魚釣りに夢中であるから、夜分にも一人で、そこらを徘徊して何の氣にもしなかつた。併し、そのころ、石見邊の海村にて牛鬼うしをにの傳説があつて、或る人から、牛鬼の現はれたときに對する措置に就て一ケの注意を與へられて居た。

その牛鬼と云ふのは、海から出現して人間を喰ひにかゝると云ふ海妖で、動物であるか又は惡鬼の類であるかは判らぬが、額に一ツの角が生へて居り、恐ろしく光つた眼のある怪物であつて、夫が出る前には、先づ濡女ぬれをんなと云ふものが現はれるのだ。濡女は神通力のある一種の陰鬼で、濡れソブタれた婦の姿をしたもので、之も又海中から出て来るものだ。而してこの者は必ず二三貫もある手頃の小岩か或は一人の嬰兒あひこを抱いて居るのだが、この者が出て來ると、妙に人間の體が半ば麻痺するやうな感じが起るのだ、つまり、この者の魅術みじゆつに罹かるのである。

さてその濡女が出て來ると、必ず人に對て、自分の抱いて出た岩か嬰兒あひこかを、一寸抱

いて居てくれと言つて渡すのであるが、人間が夫を抱くと、手に吸ひついて離れない、而して彼女は海中に没すると、やがて牛鬼が出現すると云ふことだ。つまり濡女は牛鬼の水先案内をする譯である。また濡女が出る前には、之にも前驅がある、魚の釣れが俄然多くなつたり、或は、海中から螢火のやうなものが無數に出て来て、釣する人の五躰に飛附いて粘着するのださうな。

夫で先づ濡女が出現して、石か嬰兒かを抱かせるときには、手袋か履かを手に嵌めて受取り、それに膠着させて一緒に投げ棄て逃げ出さねば生命が危いと云ふのであつた。政五郎はかねて古老から右の如き注意を與へられて居たけれど、馬鹿々々しいこと、思つて、セッセと魚津へ夜釣に出かけた。

或る夜、例により一人で島へ渡りて餘念なく綸を垂れて居た。此夜は淡月夜で静かな海面で、月の沈むころに少し風が出たが、魚の釣れがあるので矢ッ張り居つたところ夜が更けて、又風が風いだ。風が風いだら釣れなくなつたので、歸らうかと思つて

ゐるところへ、何所からともなく一人の婦が出て来た。如何にも濡れくとした細ツツリした姿勢で何か抱いて居て傍へ寄つて来て、一寸之を抱いてゐて下さい直ぐ来るからと言つた。

さてこそ濡女と、政五郎は大に驚き、履いて来た履を脱いで手に着せて、濡女の渡す石だか嬰兒だかを受取ると、濡女は海へ消込んだ、この隙に手のものを投棄て懸命に走り出したが、間もなく後から恐るべき黒いものが追迫る。危急な場合で、よく見留めるだけの餘裕はない、唯だ眞ッ黒い巨躰と、爛々と光る一眼とが目にとまつたのみである。

政五郎は懸命に逃げて海岸から五六丁も来ると、一軒の農家があつて、幸ひにまだ起きて居たので、飛込んで身の危急を告げ、堅く戸を閉させて奥の押入へ潜ませて貰うところへ、追ひすがられた。暫らく荒々しい蹄の音や、太い呼吸の響きが、此家の廻りに聞かれた後に牛鬼は去つたのである。

(此時、屋外で、今夜こそと思つたに取逃がしたのは残念だと云ふ聲がしたまの事であるが、是は牛鬼に添ふて来た濡女の發した言語であらうとも想像せられる)

政五郎は顛ひ上つて仕舞つた。而して此夜限り、さしもに好きな魚釣りを一生涯ブツリと廢めたが、餘りの恐ろしさに當分の間は氣が茫として居たさうだ。此事實は明治の少し前のことで、政五郎は既に故人だけれど、彼れの口から直接に聽いて居る人は、今も澤山存命で、極めて確實な事實である。

二

同じ石見國の那賀郡の淺利でも、牛鬼に襲はれた人がある。何時の頃のことか年代は聞漏らされて居るが、前項の政五郎よりもズツト古いことであるのは明かである。土地の舊家の折谷とか云ふの主人が、夜釣が好きで、能く居村の海岸へ釣りに出るのであつた。或る夜、無やみに魚の釣れが多いので悦んで居るところへ、濡女が其所らから嬰兒を抱いて出て来て、あなたの釣つた魚をこの兒に與つてくれと頼んだ。

折谷は、妙な女だとは思つたけれど、之を陰鬼などは氣がつかぬので、乞ふがままに籠の魚を一疋取出して與へると、嬰兒が、夫を頭から骨ぐるみに、尾鰭も残さずバリ／＼と喰つて仕舞つた。

折谷は驚いたが、濡女がモウ一疋下さいと云つたので、又一疋投げてやると、同く嬰兒が全部喰つて仕舞つた。また請ふ、またやる、奇怪千萬にも折谷の意思は濡女の言を拒む力がなくなり、遂に釣つた魚を皆嬰兒に喰はれて仕舞つた。スルと濡女が、今度はあなたのお腰のものを與つて下さいと脇差を取上げたところ、嬰兒は夫をも噛碎いて喰つて仕舞つたが、後で考へられるところでは、魚や刀やを實際に喰つたではなく、幻術に罹けて食つたやうに見せたのであると知れた。さて斯うして折谷の武器が失はれてから、濡女が、一寸此兒を抱いて居て下さいと抱かした。折谷は夫を拒むことが出來ず、嫌だと思ひ乍ら抱くと濡女が海へ消へ込んだ。

折谷の家では、その時分に妻女が留守番をして居て寝かけて居たが、その室の刀架に

ある刀が、シャン／＼、シャン／＼、獨り、で連りに騒がしく鳴り出したので、非常に怪しく思ひ、起き上つて刀架にある三本の刀を調べて見たけれど、どの刀が鳴るのか判らないが、兎に角尋常事ではない、良人の身の上に異變が生じたのではないかと案じ、屋外へ出て見る心になり、戸を開けると、内なる刀架にある一本の短刀が、自分で鞘から抜け出で、箭の勢ひで空を飛び乍ら海の方へ行つたので、妻女は大に驚いた。

このとき彼の海岸では、例の牛鬼が現はれて、襲ひ蒐つたので、折谷は逃げようとして嬰兒を投棄てようとするけれど、手に吸着して離れぬので抱へ乍ら逃げ出したが、夫が邪魔になつて、思ふほど足が運ばれず、追迫られて既に危急に陥つたとき、我家の方向から、淡くキラリと光るものが矢の如くに飛んで来て、牛鬼の胸部の方へ射込んだやうに見へたが、夫きり牛鬼は追はなくなり、又手の嬰兒もごうなつたか無くなり、自由に走れるやうになり家に馳戻ると、門外には良人を案じた妻女が

憂はしげにして立つて居た。

夫婦は事情を語合つて、護刀が危難を救つてくれたと知り、共々に感激の涙と共に海の方へ拜禮を捧げ、家へ入てからも神佛に燈明を捧げ之にも拜跪の感謝を奉つたが、彼の護刀は祖先より傳はる家寶の名刀であつたと云ふ。翌日折谷は隣人ごと前夜の場所へ往て見ると、釣道具や、喰ひ盡された筈の魚や脇差が散亂して居たけれど、彼の牛鬼や、護刀は発見されなかつた。けれども此日の夕方、沖から戻つた漁夫の話には、沖合の或る地點にて大なる黒い怪獸らしいもの、死體の流れて居るのを見たとのことであつたから、その怪物こそ牛鬼であらうとの評定になつた。

（政五郎の知人K家主談）（卷末、解説欄参照）

空から降つて來た裸乙女

現代人を喰つたやうな此標題の事實の出所を先頭に書き出す必要がある。京都生れの三上家の老刀自と、松江市の小笹某なる老人とが一室に寄合つたときに、明治維新前の京都の浪人騒ぎなどを語り合ひ、あのときは豪えらかつたなどと昔しを偲ぶうちに、京都の酒造家の庭へ裸乙女が降つて來て大騒動が起つたことに談及したのである。

小笹某は、今は按摩をして居るが、若いときには松江藩の小者として、京都勤番の士に隨從して下京に假寓して居た人間。三上刀自は、目下京都市立の高女校の教諭の母親で、家は松江にある。而して如上の二人の話しは正直な話してはあられるけれど、話中の肝腎かんぜんな人の住所が一致しなかつたり、姓名が知れて居ないと云ふ遺憾があ

る。是は年月を經過する爲めに、二人の記憶が怪しくなつた爲である。著者は先年三上教諭に手紙で依頼して、事實の調査方を希望し、兩三回も催促をしたけれど、一回の返事だも無い。無い理由が判わかつた、老刀自が、今の若い人間に此事を話したとて、何をとぼけて居るかと言はぬばかりに耳にも入れないから、話しのお流ながひもされぬので、追々と忘れるばかりですと言はれたに徴して、教諭の態度が讀まれた。

そこで、人を換へて調べかたを依頼したところ、わからなかつた。刀自は、彼の酒屋は、上京丸太町筋烏丸通りであつたと云ひ、小笹老人は、烏丸通り六條邊で惠比須屋または大黒屋と云つたと言ふたが、刀自は自分の親の家の近くであつて、屋號は忘れたけれど、所は記憶されて居ることであつた。斯う言はれて見ると場所は刀自の言が正しいやうなので、人をして丸太町方面を探索させたが、心當りが更に無いとの報告で、落膽させられたのだ。此上は小笹老人の言に従つて六條筋を調べたくて未着手であるけれど、本書に省くも残念と思ひ、場所や人の姓名は代名詞に役

をさせ、とにかく書き載せることにしたのである。

また小笹老人の言に、今から四五年前に京都の某商人に訊ねたら、話中の裸乙女は、七十餘歳で今尙ほ息災であると聞いた云々とあつたが、老人の此言葉を聞いたのは大正十二年であつた。

—(本文左に)—

慶應三年十一月廿日ごろのこと、見測らしい姿をした一人の乞食坊主が、造酒屋の暖簾を潜つて這入つて来て、酒を飲まして呉れと言つた。この僧は如何にも酒好きと見へ、背中には二尺ばかりもあるべき大瓢箪を着けて居た。

折から店先に主人が居つて、何はご要るかと言つた。先づ一升と言つたので其通り量つて出すと、そこらにあつた茶碗で、瞬く間に雫も残さず平げて、モウ一升を注文した。主人は疑ふ心もなく第二升目を量つて出すと、それも又暫時の間に飲干して了つて、更にモウ一升をと需めた。主人は少々驚いたが、言ふがまゝに又も一升

量つて出すと、夫も皆夷げたが、追がこん度は満腹した貌附きになつて、酒代はいくらになるかと問ひ、懐に手を差入れて財布を出しさうな態であつた。そのとき主人は何と思つたか、酒代は要らぬと言つた。然るに乞食坊主は大層喜ぶでもなく、軽く會釋をして、ア、氣の毒ぢやなアと言つて、ギロリと光る眼を主人に浴せ乍ら、濟まぬが序でのごことに此瓢にも詰めてはもらはれまいかと言つた。そこらに見てゐた店の者らは、此乞食坊主はけしからぬ厚面の奴だと小腹を立て、主人の面をも見合した。主人は一向感情が昂まりさうもなく静かに、それお出しよ、入れて進げようと言つて坊主の背中から大瓢箪を受取り、口から溢れるばかりに並酒を詰めて與へた。

スルト乞食坊主も初めて破顔して、一寸腰を低くし、ごうも忝け無いと禮辭を述べ、大瓢を肩にかけて立去りがけに、此家にはまだ嫁女が無いでは無いか、近い内に好いのを世話しようと言つて何所ともなく立去つたから、店の人々は乞食坊主の分際

で、よくもあのお世辭が言へたことと笑ひ嘲けたが、獨り主人だけは、今のはどうも尋常の坊主ちや無ささうだと言つてゐた。

それから數日経つて、十一月二十六日の夕方のこと、右の酒屋では、庫男どもが裏庭の池で桶類を洗つて居ると、腰卷もしない素裸の若い女が、空中からヤンワリと墜ちて來た稀代の珍事に、主人以下全部の人がそこへ驅集つた。その女は十六七の可愛らしい美人の乙女で、地上へ墜ちたときには、グタリとして正氣も無げにあつたが、今や両手で前を押へて躊躇つてキョト／＼四邊を見廻はし、蒼白な血の色をして呆きれ返つて慄えて居る態の痛々しげなものと、寒空の風がきびしいのが辛からうど、とにかく着物を出して着せてやり、室内へ連込み、いろ／＼といたはつて容子を訊ねた。

乙女は江戸の日本橋邊の商家の愛女であつて、此日吾家で風呂に浴り、上つて濡體を拭いたまでの事は記憶にあるも、それから後のことは全く夢中、此所は一タイどな

た様のお屋敷ですかと云つた態で、京都だと告げられて泣き出した。何さま空から裸娘が降つて來たと云ふ非常な騒ぎで、見物が殺到し、酒屋は木戸を閉つたほどである。

其頃近畿地方は、伊勢神宮の護符や劍先が各所に降り、降られた家があるさ、町内近所から祝つて來る騒で、人氣が立つて居る最中、酒屋へは美人が降つて來たと云ふので尙以て人氣が沸立つたのだ。また彼の降つて來る神符などは、當時の勤王家が帝政復古を神が扶けると思はせる必要上、高山から風の日に撒き散らすのだと云ふ人もあつたが、實は主にも秋葉山の天狗どもが、神の使命によつて、空中へ散らしたのだと云ふ證據が擧つた。彼の小笹老人が京都で目撃したものである。某家の屋上の瓦へ、空から降つて來た御幣の竹の柄がカサミ立込んで居たのさへあつた。又或る家へは、鳥目の附いた護符が衆人の眼前で降つて來たのも見られたさうだ。

斯くて酒屋では、乙女の親へ通知の爲に早飛脚を出した。先方では飛脚が來て、主人の弟と手代とが直ぐに迎ひに派遣された。乙女の親の家では、娘が神隠しに遇つたとして日夜大祈禱をして居る最中であつたので無事な消息に大喜びをした譯だ。また

酒屋では、毎日乙女を保護し乍ら家の事を手傳はせて見ると、何一ツ缺點の無い處女であるので、是こそ乞食坊主先生の世話すると云ふた嫁の候補者であらう、其坊主先生も神か天狗かの化身であつたらうとて、俄に祭壇を造つて祀ると云ふ騒ぎで江戸から何と言はうが此乙女は手放さぬ決心になり、愈よ大切に庇護して居る内に、迎ひの叔父が來た。そこで酒屋では、初めからの因縁を話し是非とも嫁にもらひたいと談じ込んだから、迎ひの叔父は、自分一己で決定は出來ぬから、歸て篤と相談をするとして、姪の乙女を預けて江戸へ引返した結果、その翌年三月、公然の結婚式が舉行になり、江戸からの嫁入荷は海路大阪に廻はされ、同地から淀川に依て伏見へ運び、伏見から賑々しい行列で酒屋へ練込まれたときの人氣は夥しいものであつた。その後、酒屋へは、評判嫁を見る爲めに押かける酒買ひが日夜絶間がないほどで、大に繁昌をしたと云ふ。

□

□

如上の話と反對に、徳川時代に、京都の男が裸身のまゝ、江戸へ降つて來た事實があるから、序に書かう。

（此事實は瀧澤馬琴ら一派の文人が寄合つて書いた兎園小説なる隨筆書にも載つてゐる。當時の小説と云ふ字は閑話の意味で、現代の如く作物の意味には使はれられてゐた）

文化七年七月二十四日の夜、江戸の淺草南馬道竹門の傍へ、禪ぜんもせぬ赤裸の二十五六才の男子が、空から降つて來て茫然ぼうぜんとして立てゐるのを町内の若者が湯屋の歸りに見付けて驚いて逃げようとしたとき、裸男が地上へ倒れた。若者は直ちに町役人に右の次第を届出したので、諸人が駈付けて見ると、彼の裸男は死人同様になつて横はつて居た。之を番町へかつぎ込んで介抱を加へ、醫師を招いて診察させると、別に怪我も何もない唯だ極度に疲勞して居るので暫時休息させたが宜からうと云ふことになり、そのまゝ臥かして置くと、やがて正氣がついて左の事情を告げた。

此人間は京都の油小路二條上ルの安井御門跡みんせきの臣、伊藤内膳の長男安次郎と云ふもの

で、七月十八日の早朝、嘉右衛門と云ふ友人及その僕の庄兵衛と三人連れて洛北の愛宕山詣りをしたところ、炎暑の日であつたから、山上で裸になり風を受けてゐた。脱いだ着物は、花色染の四ツ花菱の紋付の帷子に、黒絹の羽織と大小の刀であつた。其時一人の老僧が傍へ来て、面白いものを見せるから疾く来いと云つたので、裸のまま僧の後に随いて行いたやうに記憶し、その他のことは少も判らぬと告げ、さて此所は何所かと人々に訊ねるので、江戸の淺草だと知らせると、驚いて連りに涙を流してゐた。

人々は奇怪に思ひ、その男の穿いてゐる足袋を見ると、京都製で、少しも泥土が附いて居ないので、空から降つたことの證據になつた。とにかく以前にも是に類似の事件があつて、町奉行から調べに來たこともあるから、奉行所へ届けようか、又は親戚友人の類があるなら夫へ落附くがよからうかと色々相談をしてゐると、彼の男が、自分は江戸には一人の知己も親戚もないから、役所へ送りつけられたいと言ふ

た。そこで人々が衣服を恵み、役所へ送りつけ、役所の手を経て京都の親元から迎ひを寄せてもらつた。此男を誘ふた老僧は、愛宕の天狗である。彼の男は社前で裸になつたので、天狗が罰して神隠くしにして江戸へ落して困らしたのだと云ふことに言はれてゐたが、適評であらう。天狗が人眼に觸れる場合には、十に八九は僧態である。

(卷末の天狗考篇参照)

石 降 り

【解 題】

誰の所爲とも知られず、小石や瓦片類が屋内に飛んで來るのを石降りと稱せられ、古

から我國や支那朝鮮などにあつた事であるが、明治大正の御代にも、時々此事がある。併し今の學者常識家は、石降りをして妖怪事件とは見なさず、何人かが悪戯又は何か目的のあつて爲すことであるとして居る。

近年田舎の各地にても折り／＼發生し、大正七年頃には東京でも牛込若松町邊の某商家にも發生して大に人を騒がし、警察も出掛けて努力をしたが、原因は判らず仕舞ひになり、投石も亦いつしか熄んだ。田舎でのには、能く下女や小僧が親の家へ歸りたさに化物沙汰を起す爲めに演ずる悪戯であつたなどと新聞なんかに記載されるのが多いけれど、眞の原因はそのやうな單純なものでは無いこと、考へられるのも少く無いのである。

靈媒質の人間には、能くいろんな靈が憑依たがるものであるが、その質の人間は、肉體内の動亂磁氣(假稱)が多くて靈に悪用される。石投げの當人が判明したにせよ。彼らの意識に關係のない行爲即ち自分として爲したではない石投げをやることがあ

る、西洋でも或る家で石が飛んで來たり、いろ／＼の器物が飛んで來たりまたは柵から落ちて壊れたりすることが何十日も繼續して、大評判になり、遂に牧師や警察官も臨檢して監視中にも、怪事が已まぬ。然るにフト氣づくことがあつて、一人の女中を親の家へ休暇を許して歸らせたら、それが不在中には、器物飛びの怪事が無かつたので、怪事は女中に關係があることが知れたと云ふ事實がある。

東京接續の池袋には、昔しから土地の女を他村へ出すと必ず石降りなんかの怪事があると傳へられて居り、現代にもまゝ其事があることさへ言はれる位である。十年ばかり前に、池袋生れの若い女が東京の某方で下女をして居ると、その家へ外からしきりに石が飛んで來たが、或る石は、軒下で洗物をして居る下女の身邊から飛んで來たには相違無かつたけれど、空中を水平に半圓徑を畫くやうにして飛込んで來たのもあつて、到底人間の投石手段としては出來ない飛びやうであつたとも言はれて居る。

四年前、松江市の郊外持田村の農家野津某方に二三夜、礫類がつゞけて屋内に飛んで来たことがあつたが、その石は濡れてゐたり、水苔カウコウが生へて居たもので、多い夜には何百も投込まれたと云ふが、よく石の出所を調査すると、附近の溪川の小石であつたことだけ分明了が、投げるもの、何物であるかは遂に見届けられなかつたと云ふ。茲に石降り事件としては極めて著しいものが近年朝鮮にあつた。夫れを事實ありのまゝ書いて、原因の何たるかは讀者の推斷に委かすであらう。

□ □

大正十二年四月初旬、京城光化門通り十番地金永璨方へフト瓦石が飛來し始めた。最初は兒童の所爲と想はれたが、見込違ひと知れた。一晝夜に數回飛來し、簷下のきにある水甕や醬油入れの陶器などを破壊し、又は人を打倒すなどし、夫から瓦石の來ぬときには、簷や廂やに青火が燃えて消火に騒動であつた。

金は日傭稼ぎの貧乏長屋の内の宗家筋で、五軒の家族が連擔のきつぎに住居して居るので、追々には投石の禍が同住の人間にも波及するやうになつたが、投石と怪火は、夜分に人が就眠するやうになると已むのが常であつた。さて怪石の飛來が三ヶ月も續いて同部落の騒ぎが愈よ強くなる。石の大きいのは一貫目前後のもあり、いづれも程近い景福宮の庭の方から飛んで來ることだけは明白になつた。けれども何者が投げるのかは固より知れない、またボツ／＼といろんな場所が燃へ出す理由も知れない。其内に景福宮にも怪事があるとの評判も湧出た。同宮の奥深き部分にて深夜に何者の哭聲が聞こえ、闇中に數筋の鬼火が出沒したとかの噂で、鮮人間に愈よ高評になつた。また金の一類は、さまざまの災禍攘はらひの御祈禱などに骨を折つたが、毫も怪火と投石とが已まない。或る時は火氣のない庭に火のついた一把の薪たきぎもあつた。また巫女の命令で庭に祈りの壇を築くと、石が猛烈に飛んで來て忽ちに壇を破却する。

一タイ此部落は、かねて魔の窟の稱のあるところで、十年計り前には、こんな騒動が何十日もつゞいて變死者もあつたから、部落内の危惧心が強くなつたところ、七月になると投石が益す猛烈になり、時としては金の全家族を打倒さずんば已まぬ状態も見えるほどであつた。乃ち七日の正午前には、同居の李某の若い妻は洗濯中を、頭をやられて大負傷をし、卒倒後三十分を経て應急手當の爲め辛と蘇生し、その日の夕方は、庭を掃除してゐる他の若い女妻の腰へフツつけて倒し、二週間病臥の負傷をさせ、また二才の幼兒にも負傷させた。八月四日には一日に怪火が三度あつて屋根が半ば焼け、巡査の消防で消し止めた。

愈よ以て京城全般の高評になり、同地の朝鮮新聞から九日に記者を派遣する。その記者が行つて見ると、數ヶ月間に飛來した瓦石土塊の類や、打壞された器物の破片が庭の一隅に山の如く積重ねてあつたに驚いた。而して該記者が實地を檢分する間も絶へず石が疾風の如く身邊に飛來しつゝあつて危険極りなかつた。その内に一石が

李方の女兒の手を打つたので、記者は怪我なき内にと勿々引揚げた。

樹木の精

老木には精（魂）があつて、夜間に出現すると云ふ説が昔しからあるが、その形貌に就ては、慥かとした定説がない。但し木の精なるものは、人や獸類やの幽靈に比して、影も力も淡いやうに傳へられて居ることは普通である。

丹波國南桑田郡曾我部村出身の靈能者L氏の談に、約三十年前のこと、自分が若い時分に夜遊びをして戻る途中、氏神社の傍へ來ると、境内の森の下蔭の闇いところに、長さ三尺内外の播子木のやうなものが二つ三つ、空中をツン／＼ツン／＼飛んで居

るのを見た、最初は何であるか見當がつかなくつたが、その後も數回出逢つた結果、氏神の森の老木の精だと覺つた云々。

又明治四十年頃のこと、東京に中野某なる靈視の利く人があつて、毎度夜分に芝公園内にて樹木の精を見るのであつたが、その人の見た木の精は、箒木のやうなもので、樹間を徘徊するのであると云ふことであつた。其人が或る夜、友人を連れて芝の山内をブラツク内に、木の精を見たので、友人にそれを指示して、あれだ見えたかと云ふと、友人はごうも自分には見えないと言ふ。その内に友人が、何だか知らんが今五躰に水を浴びたやうに感じたと言つたら、夫こそ木の精だ、精が今、君の身邊へ來て接觸したから、その爲めの感覺であると説明をして聽かしたと云ふ事が傳へられて居る。

又東京の水野葉舟氏の書いた本の中にも木の精のことがある。カヤデ職をして居る某が、或る淡い月夜に松林の中を歩いて歸るとき、前面から、五尺計りの黒いものが

迅速に進んで來るので、二三步横へ避けて見て居ると、我が前を駆け過ぎたが、丁度大きい飯杓子のやうなもので、目鼻もなく手足も無いものであつた云々である。著者の幼年の折りに、鍼醫の三谷林仙と云ふ老人が來ての話しに、何所かを闇夜で通る折りに森木の下で、目も鼻もない圓頭のお化けに出會つたと云ふやうなことが記憶されるが、これも木の精であつたかも知れぬ。

(卷末解説欄参照)

チード家の怪異

西洋の化物屋敷の代表的なものとして一例を引く。是は加奈陀の東南カムバルランド

灣の一小港アメルストにチードと云ふ人が、夫婦の外に、一人の弟と二人の娘と同栖をしてゐた。弟はウキリヤム、姉娘はジェニー、妹娘はエルサスと呼ぶのであつたが、或る夜姉妹の娘が同室にて寝かけると、エルサスが寢床の下に鼠が居ると言つて騒ぎ出したから、姉も一緒になつて寢床を調査して見たに何も居なかつた。その翌晩も又エルサスが寝かけて飛び起き、ごうも鼠が居ると云ひ出し、布團を剥いで見ると、その下にあつた板紙箱が忽然踊り出して寢床の外へ出た。二人の娘は大に叫んだので叔父のウキリヤムが來たのであるが、その時には、紙箱は靜止をしてゐた。

次の晩に寝かけると、エルサスが俄然大聲を發して、ア、自分は死にさうだと叫び出したが、その體は臼の如くに膨れ、オ、痛い／＼と連呼して苦み出したから、醫師が招かれたけれど、ごうすることも出来なかつた。その内に不思議な膨腫は次第に減少し、彼女は何時の間にか安眠に入つた。然るに間もなく家の周圍が大震動をし

て雷の如き音がしたので、一家の人々は驚いて戸を開けて見たら、外は晴れた靜かな夜であつた。

二三夜を経て、エルサスの寢臺で、コツ／＼と電信をかけるよきの打音の如き叩音が連發したが、誰も應ずるものが無かつたので、靈怪が怒つたらしく、エルサスの布團を左右へ投げ散らした。姉は膽を潰ぶして昏倒し、痙攣を起した。その次の夜は非常に物騒で、枕が飛んで縦横する騒ぎに、ウキリヤムが來たら、その顔に枕が當つた。次の晩から三四夜、エルサスの體が必ず膨れて痛むので町内の高評となり、牧師や學者が來訪したけれど、策の施しやうも無かつた。然るに此夜突然壁に文字が刻み附けられた『エルサスよ汝は予に殺される』と讀まれた。その後數日間、靈怪は壁板や寢臺を叩いて交話を求め、人々は漸くに氣附いて、此方も打叩いてA B Cの符牒を定め、夫を土臺にして應話をし、茲に通話の途が開けた。

靈怪曰く『余は惡鬼なり、大に世を憤ることあつて斯く怒るなり』と次に『余は此

家に住み、人に殺されたるものなり』と告げ、次の日に『エルサスよ、予は此家を焼くであらう』と告げ、遂に夜になると屢ば點火した燐寸が天井から落下して來て、敷布や夜具類を連りに焦がしたが、後には白晝にも火が降り、遂に家は半焼をした。

又或る日は、臺所のバケツの水が、火氣なくして沸騰して湯になつたらしいので、手を浸けて見ると依然として水であつた。エルサスは遂に父の友人ホワイト方へ預けられたが、怪事は其家へも現はれた。エルサスが室内を掃除して居ると、天井からその箒木を奪取りてエルサスの頭へ逆まに落しつけ、又はヅシン／＼と何者かが、大跨に屋内を歩むやうな音が聞へた。

或る日、ワオルター・ハツベルと云ふ名士が來て當分其家に滞在して怪異を視察することになつたところ、靈怪は小癩など腹を立てたらしく一層慘憺たる怪事を生せしめるやうになつた。ワオルターの顔面へ器具が飛んで來て打撲傷をつけたり、エル

サスが膝の上ののせて居る多くの釘が、忽然赤熱して四方へ飛散したり、または兒童の手にした鋭利な小刀が、獨りで鞘を脱してエルサスの脊中に突立ちて鮮血を迸ばさせ、その悲鳴を聞いて馳附けた人々が小刀を拔取ると、小刀が復も奪はれて元の傷所へ突刺された。

又或る日は種々な家具が集合して五六尺の高さに積み累つた末、最下部のものが抜け出て其の上部の物が悉く崩落したと云ふ如き惡戯半分の騒ぎが起つた。此家では右のやうな怪事が約一ケ年も續いたが、遂にいつとなく終熄して現はれぬやうになり、又迫害の焦點となつてゐたエルサスも無事なることを得たのであるが、此家の惡鬼は、全くエルサスの體が靈媒質として靈の憑き易い體であつたのを利用して、自分の或る鬱憤を霽さう目的で、いろんなことをやり出したのだと想像された。

人や家具類の宙昇り

第一例

奇術師のプログラム見たやうな標題の實例がある、目下東京淺草千束町二丁目に喬居の瀧野八五郎と云ふ五十餘歳の人の幼年のとき、その家に發生した怪事である。その頃此人の家は群馬縣での指折りの舊家で、邸内に杉の老大木が一株あつて、祖先時代から、この杉は秩父の三峰神社の天狗が上州赤城山へ通ふ路筋に當り、天狗が休息する大木だと云傳へたものであつたが、八五郎君の父親が迷信嫌ひから、一朝惜氣もなく其木を材木屋に賣つて了ひ、伐採されてから怪事が發生した。

一家の器具類が何んでもござれで獨りで天井の方へ舞上り、或るものは半時間も一時間も天井裏に吸着してから、後に元の位置に下りるので、騒動に及んだが、或る

時は重い箆筒^{たんす}までが屋鳴りと共に天井裏へ舞上つて仕舞つた。その時は家族が残らず庭へ飛び出したことを八五郎君は能く記憶することである。君の家は、この怪事の發生と共に悲運に赴いて、遂に宏大な邸宅を他人の手に渡すやうになつたのである。彼の天狗の休息すると云ふ大杉の切株の跡は八疊敷もあつたと云ふほどの稀有な老大木である。

第二例

是も明治の聖代の出来ごとである。埼玉縣秩父郡三澤村の農、田中勇作方にて、或る日、近所の農夫が持つて來た鎌^{かま}が突然ヒラ／＼と天井裏に舞上つてヒタリと吸着したが、やがて急速力で下へ落ちた。夫を最初として毎日のやうに室内の種々な器物が天井裏へ舞上るので評判になつた。或るときは膳の上にあつた味噌汁の碗が昇つてから膳の上へバタリと落ちて來たのに、少しも中の汁が外へ溢^はれなかつたのも不思議であつた。或る時は、重い石臼も昇つた。

村の駐在巡査が、眞偽を疑つて臨檢に來たとき、その手袋が舞上り、呆れ返つて居ると、今度は巡査の體がフラ／＼と昇つて頭が天井裏に吸着せしめられてから後元の所へ落された。あとで聞くと、その折りに巡査は意識は有つても肉體の自由が奪はれて、丁度催眠術にでもかけられたやうな氣持がしたと云ふことであつた。或る日埼玉縣の警察部長がこのことを聞いて、巡査の案内で實地臨檢をやると、部長の帽子がヒラ／＼と舞昇つた。此日は澤山に物品の舞昇りがあつて人々を驚かした。しかし此家では一度も人間に危害を來たさしめたことは無い。

勇作は、遂にたまりかねて大宮町から巫女を招いて怪物の魂を寄せて見ると、鎮守の神木の精が、或る日勇作の息子の爲めに汚された祟りであると言つたので、祈禱を修したら、怪事が鎮つた。この事は間近い明治四十年頃のことである。

今から百餘年前に、出雲國神門郡鹽治村の某農家にも、石臼などの重い器物の舞昇り

や火氣のない所の發光などが瀕發したので、村内の騒動となり、晝夜多衆が詰めかけて居るのに、怪事が熄まない。遂に松江藩廳に乞ふて、一人の武人を招寄せたところ、依然として怪事が已まぬ。後に祈禱をして漸く鎮靜に歸したが、この家の怪事は、その家にて虐待されて死んだ若い娘の怨靈の所爲であつたと云ふことが後日判明した。

立山熱泉での怪象

越中の立山には、許多の熱泉が囂々と凄い湯烟を立て、湧出する所があつて俗に之を地獄と稱して居るが、その内に百姓地獄と稱へる分に於て、明治三十年頃に一怪事

があつた。同縣東礪波郡木杉村の中流農の田中某と云ふがあつたが、その妻女は不心得にも、良人の目を偷んで、下男の某と私通して居た。田中某は或る日、同志三人と途中一泊の豫定で立山へ登り、先づ權現堂へ參詣し、續いて地獄見物に廻り、彼の百姓地獄の側に立つて、その熱泉湧出の壯觀に見惚れて居る内に、熱泉の中にフト我女房の姿が浮んで苦悶して居る光景が見へた。

無論幻影的のものであるけれど、その餘りに印象が明瞭であるので、某は思はず呀と叫び、無我夢中に驅寄つて、女房の掛けてゐた襷をつかんで體を引揚げようとしたら、襷はフツリと切斷して姿は搔消す如くに湯の淵の下へ沈み去つた。然るに奇怪千萬にも、掴みた襷だけは手に残つたので一同不思議の念ひを發し、急いで下山して歸途に就いた。ところで某の家では、此日午飯時に妻女は襷掛けにて食事を調べ密夫に喫せしめようと働いて居るとき、俄然體が宙に浮いて上昇しかけた拍子に襷が斷絶したなりに行衛が不明なので、頗る不安を感じて居たのであつたが、翌日

良人が歸宅して地獄での容子を話し襷を出して見せたら、妻女は愈よ驚き、佛戒に逢つたと信じその非行を懺悔したと云ふ。

雜貨店主の奇蹟

最近の容子は知れぬが、去る大震災の前に、東京深川綠町三丁目に加藤と云ふ雜貨店があつて、主人は熱心な不動明王信者であつたが、その人には、いつも不動尊の靈が宿つてゐるかと思ふほどの不思議が數々あつた。假令ば、その人の所持品で、不斷身近かなものである煙草入れとか、帽子とか云ふやうなのが、疊の上に置いてあるのに、家内のものが足でも觸れるなら、忽ち取つて投げ倒されるやうに、體軀

が飛上つて倒れるなど非常に猛烈な現象が起る。

大正九年のこと、加藤は五人連れで、小田原の上の道了権現へ參詣をしたが、そのとき山駕籠が四挺しかないので、誰か一人乗らないで徒歩で登山をせねばならぬことになり、籤でも抽くことにしようかなど、提案されたところ、加藤が、自分は駕籠に乗りたくない、神佛へ詣るものは徒歩のことだとして、乗らないで、一行の後からホツラ／＼歩いて登山に就いた筈であつた。然るに他の四人が駕籠で頂上へ達し、駕籠から下り立ちて見ると、加藤はいつの間に登つて來たのか、山上の茶屋で悠々として茶を飲み乍ち一行を待つてゐたので、一行は驚いて、どうしたものかと異しみ問ふた。そのとき加藤は「イヤ何一寸」と軽るく挨拶をしたゞけで、ニヤ／＼と笑ひ乍ら委細を告げなかつた。

夫から一行は參詣を了つて下山をするとき、若い人が、自分等は、今度は歩るかしてもらひ、加藤さんは是非乗つて下さいとて駕籠を譲らうとしたが、加藤は矢張り、

徒歩で降りると主張し、一行に後かれて山から下り出した。ところが一行が下山をして小田原驛に着いて見ると、またも加藤が先立つて着驛してゐて、一行の乗車切符など買ひ調べて待受けてゐたから、非常に驚かされた。彼のこの日の舉動は、躰が空中を飛んだと云ふ外には、解釋がつかないことゝされた。この人は、非常に恬淡無慾の人間で、その店に坐つて居るとき、買人が來て、今日は錢をもたぬから貸してくれと云ふものがあると、知る知らないに拘らず誰人にも、お易いことだとして云ふがまゝの物品を持たせて遣つて、一度も帳面に附けたこともないが、その借買ひをした人間は、遂に一人として後日に錢を持つて來ないものは無いのださうだが、是も矢ッ張り不動の護りに依るのだと噂さされたものだ。

奈良の杉の神

奈良の三笠山の裏手の字一ノ井と云ふ場所に、二タ抱えもある大木の杉があつて、その下に庵室を構へ、人の吉凶禍福、病氣の由來や治療法などを透視のやうにして知らせる百田哲龍と云ふ青年があつて、現在そこで流行つてゐるが、この人の由來を聞くと、元來奈良の表具屋の長男で、十年ばかり前のこと、或る日フト憑物でもしたやうな狂燥状態が現はれて盛んにハシャイだ、而してキョロ／＼して街路を徘徊するときに、追手が來て引捕へようとする、六尺七尺の高壁などを一ト跳はねに飛越へて去にげるやうなこともあつた。

或る日、家出をして一ノ井に行き、何とは無しに彼の杉の太下の根もとに坐つてゐると、何者か耳の傍で大きい聲で『自分は杉の神だ、自今そちの體に宿つて何事でも

教へてやるから訊たづねよ』と言つた。それ以來、何事に對しても豫知が出来るやうになつた。我家で父親へ、今日どの家から、か様／＼のものを表具してくれと云つて持つ来るよと言ふと、その通りになるから高評になり出したものだ。

炭粕に集つた邪氣

東京の四谷區片町に岡田一はじと云ふ電気機械工をしてゐる青年がある。此の人の家は大正十二年一月に火災のあつた跡へ、地所を買つて新築をしたのであるが、家を建てる前に、入口の右方の土地が一坪ばかり低いので、近所の湯屋から、石炭の焚粕をもらつて來て、夫で地盛りをしたのであつた。さて新屋に住つてからは、一家に病

人の絶間が無い。子供と妻女と母親とが代り／＼に病氣にかゝるから、八月に母親が同區伊賀町の伏見稻荷の支教會へ往つて伺ひを立てさせると、今年の四月か六月かに、乾いなかの方角から土を運んで来て居るが、その土と云ふのが普通の土ではない爲めに邪が集つて来た爲めに一家に祟りがあるのだと告げた。

そこで母親は、自分はよく知らぬけれど、地盛りなどをしたもので無いと思ふと云ふと、イヤ必ず地盛がしてあると斷言をされたので、我家へ歸て息子に訊くと、如何にも四月に湯屋から炭粕を貰つて来て地盛りをしてゐると告げられてビックリした。それから一君が磁石を立て、見ると、湯屋は乾に當つてゐるから、困つたことになつたと思ひ乍ら、今更土臺下の土の取替へも出来ぬので其まゝにして日を送つて居た。スルと或る日支教會で一君の母親に、悴せがれさんは心臓病に罹り出したと告げた。一君が夫を聞いて、自分はこの通り健康で心臓病なんかには罹ることは無いと打消して信じなかつた。然るに間もなく心臓病にかゝり、四十餘日も病院へ通ひ、い

ろ／＼祈禱の結果か、近ごろ僅に快復したと話して聞かしてくれた。

守護靈の冥護

松江市西端に接續した生馬村いぐまに吉祥寺と云ふ禪寺があつて、住持の山崎ト鳳と云ふ人が、境内に陀枳尼天を祀つた一小祠を有つてゐるが、此僧には一個の守護靈があつて種々の不思議を出現させる。此の守護靈は矢張り僧體で、いつも緋ひの佛衣を着けて一人の若い黒衣の僧の靈を従者のやうにして居る。今から十七八年も前のこと、師が同國日御崎村で瀕死の大病に罹つたとき、かねて信仰する陀枳尼天ニ實は靈狐ニが現はれて病氣を癒やしてくれた奇蹟談もあるが、この靈狐の手引で右の守護靈

が来たのださうな。この守護靈は曾て師の親となつてゐた者の亡靈であるが、いつか冥界で別々になつてから子の魂の行衛を失ひ、久しく搜索中のところ、靈狐の幫たすけけによつて師が顯界にあるのを尋ね當てたのださうなが、尋ね當てたのは、師が松江大橋を渡るときのことであつたと云ふ。

ト鳳師が夜更けて歸るとき、家族の寢室の襖ふすまがスーツと開くことがあるが、夫は守護靈が知らせをやるのである。曾て或る冬の夜ト鳳師が田圃道で墓口を落し乍ら夫と知らずに戻つて来てトンビを脱ぎかけると、懐中がすたつたで無いかと注意する聲が聞こえるので、袂へ手を入れて見ると如何にも無いから驚くと、十町ほど後へ落したと告げる、そこで提灯をさげてさがしに出て見ると果して告げた如く遺失して居たのを拾つた。

元明治大學の講師をしてゐた横井と云ふ人間が、近年靈能が現はれるやうになり、行者のやうなことをして諸國を廻はる内、あまり素行が修らぬので靈能が消失したの

であつたが、出雲へ来て吉祥寺へ止宿してゐる内に、寺内の辨天祠の靈の分靈くわんを勸くわん請しょうしようとし、毎朝お勤めをして太鼓を叩いて靈の機嫌取りをやるのであつた。然るにその折りにト鳳師夫婦の眼に師の守護靈が辨才天の祠から飛出して五七間の空へ避けて居るのがいつも見へるのであつた。師の家内も良人の誘導によつて靈能が発生し、或る場合には師を凌ぐこともある。七輪に炭火をおこすとき、炭がパチ／＼盛んにはしれるとき杯にエツと一ツの氣合をかけると、すぐに炭がはしれなくなるやうのことを村民どもの眼にはたいした評判事であつた。

(最近の容子は知らない)

第二篇

古墳の暴崇

文政十一年六月、京都の東山なる阿彌陀ヶ峰あみだヶみねの地續きの地藏山の土を、東本願寺再建の地ならし用として買取ることになり、山の管理人である大佛妙法院宮の執事松井大隅守の承諾で、土を掘らせることになり、十ヶ年を一期にして金五十兩で契約書を取交し、本願寺から役人が詰めて、日々多くの人足を以て土を掘って運び出した。然るところ、土掘場の附近に、古來山神を祀つたしるしがあつて、神の松と言傳へた三株の古松もあり、そこら四十間四方だけは、土を掘取らないやう豫じめ本願寺へ申込であつたが、その境堺近くになつて吹輪ふいご用の好土が出だしたから、その土欲

しさに、穴に杵きねを入れ三丈計りも掘り穿つた結果、八月上旬に大きな壺の横腹に掘り當てた。

その壺に鍬先が觸れると、俄然土中が鳴動して、壺は抜け落ち之が爲に人足が二名壓死したのみならず、殆ど同時に此地藏山の土賣買の世話人鍵屋彌兵衛父子、丁子屋善七、松井大隅守、本願寺係役二人以上六名が俄然大熱病を發したので、色々と祈禱をしたけれど無効で、追々と死亡者が出るやうになつた。そこで大隅守の親戚が山神の祟りであらうと氣付き、祈禱者をして神下ろしをさせて見ようとして、その頃流行してゐる繩手通り三條下ル三軒寺の内、猿寺なる老尼方へ若黨を頼みに派遣した。

右の老尼は型の如く靈を下だすの法を修めると、やがて靈が憑つて来て、使の若黨をキツと睨み、頭づかが高い下れさかと厲聲で叱したので、貴方は何人かと問ふたら、我れは明智の一類だと答へた。また問ふて、明智の一類とばかりでは不明である、何と申

す人かと問へば、左馬介であるが、人の情によつて、地藏山に葬りを受け、山の神と崇められるのに、このたび理不盡の振舞勘忍し難く、一々思ひ知らしてやらう、立歸て此旨申せと怒鳴つた。若黨も心ある男で負けては居らず、左馬介には江州坂本にて滅亡と申傳へ、此地藏山に墳あることを聞かぬ、また山の神から四方四十間は避けて土を掘るやうに命令したのに、人足どもの慾心で不法を働き、大隅守の關知せぬ儀である。先づ怒りを鎮めて大隅守の快復を取圖らひ玉へ、然る上は、神も佛とも永く彼の山にて尊崇させ申さうと言つたら、さらば歸てその旨を傳へてくれと言つて靈は昇つた。

夫から若黨は急いで主家へ歸著したところ、同時に大隅守は落命をした。かくて前後八名が同じ病症で斃れたので、その後は恐れて誰も山に入つたものが無かつたが、漸く妙法院宮家末寺の功節庵が現場に往いて讀經供養をした。その後、或る日建仁寺町五條下る煙草屋の丁稚が、地藏山の近くを通りかゝり、評判の穴をのぞいて見

たばかりで忽ち大熱を病んで死去した。斯様に左馬介の亡魂の祟りが劇しいので、本願寺からは、土を元の山へ返すことにしたけれど、土を運搬する者が無く、その内に本願寺でも種々の變事が發生したから、工事を一時中止した。

(兎園小説外集)

墓と靈蛇の守護

徳川時代の末季に、江戸東叡山の領地の根岸の御隱殿と稱せられた別莊地内の池畔に辨才天の祠があつたが、文政三年十一月中旬、門跡宮の臣豊田沖見と云ふの夫婦が辨才天に參詣をしたところ、その夜、家僕の夢に、或る物があつて告げるには、自

分は當家の臺所の流し元に年來栖んで居る墓である。今日主人夫婦辨才天へ參詣の折りに、夫人は月經の不淨の身で橋を渡つたところ、その橋の下に靈蛇があつて行法を修して居たのが、不淨の氣に觸れて行法が破れ、主人夫婦を恨んで明晩は他の蛇を驅り催して怨みを復すことになつて居る。自分は年來の恩報じの爲め命を捨てて蛇を防ぐ志はあるも、力が足らぬによつて、何卒助力をして蛇類を追拂つて下されと云つた。

夜明けて僕は、夢の告げを主人に報告したところ、主人は半信半疑で生返事をしてゐた。併し何か心に覺へがあつたのか、その夜は、一室毎に燈を置き、主僕共に佩刀し、槍や棒の類を身につけて徹夜で用心をして居ると、何の事もないので、さては虚夢であつたかと思つた。然るに此朝、流し元で一疋の大型の墓が仰向けさまに斃死し居るのを發見して心不安を生じたところ、その夜、主人は墓の夢を見た。墓曰く自分こと既に命を捨て、蛇の殃を防いだから此後は祟りは無い。自分の亡骸は

鼠山に埋め玉へ。また吾は命が終つたなれど子孫を残し置いたれば、それらに御家を護らせ申すべしと言つた。主人はこの夢を信じて彼の墓の亡骸をわざ／＼鼠山へ持つて行つて埋めた。スルと次の夜には蛇が主人の夢に入つて告げて云ふには、當家の夫人の不淨に觸れて行法を破られ、怨みを復へす豫定を墓に防がれ、その墓を殺したからモウ怨みは霽れたによつて爾今は吾れも當家を守護することになつた。疑はしくば、辨才天に詣りて見玉へ、必ず驗があらう、又家に歸つて鞠箱を開けて見玉へと告げた。

主人は稀有のことに思ひ、次の朝辨才天に詣つて見ると、社壇から忽然二疋の小蛇が走り出、一は祠の簀子の下に隠れ、一は池の中へ走り込んで共に姿を隠した。それから宿所に歸り棚から鞠箱を下ろして蓋を披き見ると、内に小き墓と蛇とが入つて居たので、夫婦大に驚き、墓は流し下に放ち、蛇は立派な壺に沙を敷きそれに入れて日々祀つた。

（この話は豊田沖見の同僚の鈴木有年が他人に漏らしたことであるが豊田は有徳人の恭謙者で虚談を言ふんでない）
（免圍小説外篇に附記してある）

生靈と死靈の闘争

享保七年、美濃大垣侯戸田左門の江戸住みの家士某は妻に死なれてから芝の濱町方面から後妻として銀と云ふ女を娶つたが、或る日土用干をしたところ、美事な女の筆蹟で歌書などを寫したものが出た。夫を銀が見て此美しい文字は何人の書かと尋ねたので、前妻の書であると告げると銀は大に感心して、かゝる人であるから定めし賢女であつたらう、包まず話して聞かせて下さいと言つた。

良人は平素は一口も前妻のことを口から出さなかつたところ、常に心に忘れなかつた

ので、現在の妻の切な尋ねに會ひツイ口を滑べらかし、前妻は女としての道は何一ツ不足の無い良妻であつたとて、いろ／＼事例を擧げて話して聞かすと、銀は聞て溜息をついたので、良人はいらざることを話したものと氣が付き後悔をした。

その後、銀は何となく病氣らしくなつて衰弱が加はり、食事なども減少し、前途が案じられるので、保養の爲め親里へやつたところ、追々に病衰して先途も永くないやうに見られるに及んだ。その頃銀の良人の許へ旦那寺である深川の淨満寺から使者が来て、少々お耳に入れたいことがあるので、足勞乍ら出て來いとの招きを受けたので何事を聞かされるかと思ひ早速に訪ひ行くと、和尚が對面して、近ごろ毎夜墓地へ光り物が飛來して墓の内へ墮ちると云ふ噂を聞いたので、昨夜拙僧ちきにためすと、人魂らしいもので、貴殿御亡妻の墓の上にて消えたけれど、同時に墓の内が鳴動し、暫時の後にまた光り物が飛出たが、夜によつては一夜に二度來ることもある、先づ一度は缺がさす來るので、御告げ申すがよからうかと存じ斯く御足勞をか

けたのだと話した。そこでその火玉は何れの方向から来るかと訊ねたら、いつも西の方から来ると答へた。そのやうな儀ならば、今夜拙者は實地をためすべしとて一旦寺を辭去し、その夜初更過ぎてから寺へ行くと、和尚は寺僧一人を附添はせうとしたのを辭退して、一人で墓地へ行き、莫塵を敷いて夜の更けるのを待つて居ると時刻移つて果して一ツの光り物が西方から飛んで来て、前妻の墓の上で消えるや否や忽ち墓の中が物騒しくなつて恰も人が組み合ふやうな音響がするから、これは不思議と刀の柄に手をかけて身構へをして居る内にやがて墓の中から火の玉が飛出た夫を抜打にして眞二ツに斬付けたら、手應へがして火玉は消え失せた。いづれ妖怪變化の所爲であらうと思ひ、月影に透かして其邊を搜して見ても何も居らぬ。刀を見るとノリがぬらくと附いて居た。このことを寺へ告げて置いて家へ歸り、まంచిりともせず考へ込んで居ると、夜開けに濱町の舅の家から急便が来て招くので不安に思ひ馳行くと、舅が對面して、さて銀こと先程養生相叶はず果てましたが、夫

に就て何とも合點あつてんのゆかぬは臨終の模様、實は昨日はいつもより快方の容子であつたが、宵のほごから例により正體なく寢入り、吾々両親も少々まごろんだところ、八ツ時分と思ふころ、アツと魔まはれて聲を立てたので、早速立寄て見ると息が絶へて居た。しかしその體甚だ不思議、先づ是を見給へどて、銀の上にかけてある夜着を取つて見せると、後ろの肩先から胸板へかけて刀で斬り割つた同様の傷である。良人は之を見て默然とさし俯き暫時思案に暮れたさまであつたが、屹度思案して、實は昨夜斯くくの怪事に遭つて淨満寺での由來を語り、全く銀が嫉妬の魂に相違はないがさても不便のことと後悔しても及ばず、表向はたゞの病死にして葬り、後ねんごろに弔ひをした(怪談老の杖)

(卷末解説欄参照)

青年武士を黜つた怪僧

徳川將軍家の御用繪師狩野某の江戸の中橋の居宅に島津藩の中川右内と云ふ若侍が内弟子に入り込んで居た。或る年の（明和又は天明ごろらしい）十二月二十二日と正午過ぎに、二階の自室に一人居て、鏡に向ひあこひ髭を抜いて居るとき、何者か後へ來た姿が鏡に映つたので振返つて見ると見知らぬ僧が立て居る。誰人かと訊ねると、此所では言ひ難い一寸門外へ出給へと云ふので、刀を提げて共に門外へ出ると、外の事では無い、自分は鎌倉から來たものであるが、今夜光明寺で餅の振舞があるから連れて往きたい、是から直ぐに同道しようと思ひ強ひるのだ。

右内は少々驚いて、自分は近所へ用事があつて出るにも師匠へ斷つて出ることになつて居る身だから今から直ぐとてそのやうなことは出來ぬと言へば、出來る出來ぬも

無い、直ぐ行くのだとて無理に手を取て引張り立てたが、強力であるから右内は中橋から品川通りを引立てられて行く途中、行くまいとして散々に抵抗した。然るに往來の人は多くあるけれど誰一人も見咎める者なく甚だ不思議に思ひ乍ら、餘ほど引張られて行つた。遂にモウ自分はこの僧の意思を脱することは出來ないと觀念し、抵抗心を撤し、連れ行かれるまゝに何里も進む内に日が暮れて一時間餘りにも及んだ。

そのとき僧が言ふには、是まで同道したけれど、最早餅振舞ひが終つて、あの通り人々も歸り行くから、此所から歸られよと云つたので、向ふを見ると、桃灯が夥しく見へる。右内は腹を立て、行かぬと言ふのに無理に引張つて來て、今に成て振舞が濟んだから歸れとは奇怪だと怒鳴り、抜打に僧を眞二ツと斬付けると僧はフワリと搔消す如くに姿を失ひ刀先は松の木根元に切込んだ。右内は奇怪に思ひ、夫から江戸へ戻る内に、夜が更け、路は闇らしい空腹にはなる、心身ともに疲れて歩行に

惱んで居ると、向ふの方に灯の影が見へる所があるので、それへ尋ね行つて見ると、小さい家である。案内を乞ふと、内から寝ざめらしい態さまの一人の老人が起きて出て何用かと問ふた。

右内は今日の容子を告げて一宿を乞ふたら、快く承諾をして内へ上らせ、何も無いが冷飯でも召かせとて茶釜の下を焚き、茶漬を振舞つてくれ、菜は晝の残物だとして平皿に盛つた筈たげのこであつた。そのときに何の氣無しに食つたが、後で考へると、十二月の極冬に生の筈とは珍らしいと氣がついた。翌朝未明に暇乞ひして出發して漸く師匠の家へ歸着すると、師匠の家では右内が失踪したとて方々搜索して騒いで居るところであつて、昨日來の容子を語ても眞實にしないので、さらば證人をつけ玉へ、證據を見せようとして、一人を同道して行つて見ると、斬附きりつけけた松の木はそのまま、在つたが、一宿した家は如何に尋ねても發見が出來なく、その邊に人家は絶へて無かつた。(其昔談)

火を吹く鬼面の怪物

大和郡山侯の家老柳澤淇園の茶園が、郡山から十三町ばかり西の城村と云ふにあつて、園丁に彌二兵衛と云ふ六十才ばかりの農夫の律義ものを使つて居たが、五月の或る日、彌二兵衛は主家へ來て夜更けて歸途に就き、六七町ばかり歩んで富の小川の前の木の島川を涉りかけると、小泉の方に當り遙か西南の金剛山の麓の方に當て一個の火が現出した。怪しと見る内に、その火は非常に迅速に飛行して來て、地上約二間ばかりの空を七八間の近距離に迫り、その飛行の音はブー／＼夥しく響くと風たこ箏の鳴紙の如くあつた。よく見ると繪に描いた鬼面の通りのもので、上下の牙生へ違ひ、髪黒くて長く垂れて地を曳くばかり、口からは火焰を吐いて凄まじい態である。彌二兵衛は、かねて化性火に逢つたときは早く内俯に臥すものこの古老の

語を思出し、堤の下へ飛入つて内俯になつて居ると、その火は彌二兵衛の頭の上をすれ／＼に通り返り過ぎて今度は方向一轉、北の方へ鳴り渡つて飛去つた。

(淇園先生一筆)

(現代人に言はしめば、悪戯者が人を驚かす爲に、奇構の紙鳶を造つて飛ばせたのが、又は彌二兵衛の臆病に生じた幻覺に相違はないと言ふであらう。筆者も是には同じ疑ひの餘地もあるが、眞の化性の業とせば亦事實に非らずとは断言出来ないから、一應記録をしたのだ)

伊吹明神の出現

享保八年九月廿五日の夜、江州伊吹山の麓が俄降りの大雨で震動をしたが、その雨が止んだ後に、麓の原の中から大入道のやうな物が出現した。而して左右に松明のや

うな火が多數一列になつてゐて伊吹山へ登る。村民は聲々に、地震ではない外へ出るなど叫んで相戒めてその怪光景を眺めて居る内に、何事も消滅をした。土地の古老の言に、かゝることは五六年目に一度づゝあり、伊吹の明神琵琶湖から出現して登山し玉ふと云ふ云々。翌日に見ると、湖岸から山上まで約二里のところ、田島草木幅三間ばかり一筋道に焼けて焦土となつて居た。(月見堂見聞集)

大阪城内の怪

大阪城内の化物現象は、いろ／＼とあつたやうに傳へられる中に、文政十三年十月上

旬、加番土井能登守の山里丸の源八曲輪と云ふの番人長屋へ化物が出た。それは真夜中に一人の足輕が目を覺まして庭へ小便に出ると、二十二三才の御殿女中風の女が背後に立つて居た。かねて剛氣な足輕であつたので、取押へようとしたら、反對に後ろへ引摺り投げに投倒されたので、おのれと叫んで起上りかけると、今度は腕を取られて前方へ五六尺ばかり引摺られて氣絶をした。この争鬪の音を聞つけた足輕仲間が目をさまし、大勢出かけて来て介抱をして息を吹返へさせたが、彼の怪女は見られなかつた。翌日彼の足輕の腕を見ると、握られたところが紫色になつて居り、後には黄色になつて居た。(元祿寶永珍話)

柿の木に残る女の宿念

享保九年三月中旬のころ、廣島の淺野侯家臣、平山角左衛門が屋敷替へを命せられ、新邸の普請を爲すとして、普請小屋の傍に古木の柿樹があつて、邪魔になるので、下人の幸助と云ふが之を切り倒さうと云ふと、勘太夫と云ふ大工が制止して、この柿の木には靈があるから伐るなど言つた。幸助は嘲笑ひ、その靈と云ふものがあるなら見たいものだ、もし出たら天晴れ對手になつて遣はさうと大言を吐いた。

その夜の深更に、空中で、汝幸助今日わが事を言つたイザ此方へ出て來いと呼ばはる聲もろとも、幸助の體は空中に掴み上られたが、戸も障子も閉ちてあるまゝに何所から出たのか邸内の隅にある堀の中へ強く投込まれた。この騒動に多くの人々出て見ると、幸助は堀水に腰を浸し乍ら、拔刀して立てゐた。次の夜は角左衛門が番を

して窺つてゐると、深更に及び、またも前夜の如く、空中から幸助を挑む聲があつたので、加持祈禱をしたが効験がなく、毎晩聲がある。

そこで角左衛門は空中に向て、斯く毎夜來つて幸助を挑むものは何物ぞと詰ると、我れは百三十七年前に此屋敷の主人であつた多賀藏人に殺された女で生れは京都名はきみと申し、齡は二十二、此屋敷に奉公を勤めたが、庭の柿の繼穂に初結の果三つ生じ、藏人之を愛し、柿果を取るものあらば殺すべしと制した、然るに吾れその一を摘み喰ひしを怒り、柿木に縛りつけて鍵にて突殺したのは三月十六日のことそれ以來魂魄柿木にやごりて年を経て今日に至るも、誰も知る人無し。然るに此度幸助初めて吾が事を言ふ、よつて此の怪を現はしたり、哀れ柿の木を五尺掘返して、新たに壇を構へ、靈として祀り給はゞ、國中の災變あるとき、前以て告げ申し、また老若の諸病を吾れに祈り玉はゞ平癒させ申さうと言つた。角左衛門このことを主君に訴へ免許を得てきみ女を祀り、諸事に便益を得るやうになつた。(月見堂見聞集)

災難除けの文字

昔し紀伊國に弓射ることの上手者があつて、山野で鳥獸を射るのに百發百中であつた。或る日野に出て鶴を射ること二度に及んだが二度乍ら中らばかつた。この鶴は遂に追捕りして捕り獲て見ると、羽に捺拾撐撈シヤウヨウケンシヤウカクの四文字が書いてあつたから、この文字は矢丸を免れる呪文であらうと想ひ、試みに外の鳥に書きつけて之を射て見るに、一矢も中ることが無い。そこで自身にもこの字を災難よけの護りにして一生涯無事安穩にくらした。徳本上人もこのことを言つて居り、また天明五年將軍家の御小姓新見長門守が、田安門外の中が淵へ馬と共に落入つたとき、この文字を肌につけてゐた爲め怪我をしなかつたので、將軍このことを諸人へ弘めよとの命令を出した。また此度京都大地震の前に、吉田殿からもこの護りを出してつけさせてゐた

人は一人も怪俄が無つたと云ふ。(元祿寶永珍話)

西霧島山の仙郷

(西海雜誌所載原文のまゝ)

霧島ヶ嶽は日向大隅薩摩の三國に跨る大山にて、その大隅の方なるは西霧島と云て頗る大社にして、何時の世より太敷ますとは知らざれども、空海一度錫しゃくを入れられし後は華林寺間錫杖聲院と號なづけて今は密宗の精舎となりけり。予天保七申歲登山して歸るさ此寺に宿りしに、方丈五峰和尚種々山中の奇を語る其中、當寺に年久しく仕へける下僕五助と云ふもの日々山中に入て樵けるに時として一の桃林に到る事あり

けり。さして寺より遠くとも思はず又近しくとも決し難きが、二八ばかりよりまだ三十歳に足らぬ眉目まゆめよき女子ども種々の美しき衣服にて遊び戯れ給ひけるが、その年長と見えて別けて衣服の美しく異様な婦人、五助を呼で、世の中の事どもを尋問ひつゝ桃を與へて云らく、此桃を食する時は、不老長生にして我等が如く何時までも歡樂に月日を送る身となるべし、併し必ず此林より外へ持出ること勿れ、若し我が言を犯すときは其詮なしとぞ深く戒め給ひき。

五助も始めの程は其教を守りしに、後にフト過つて其事を人に語りしかば、狐狸に馬糞類を與へられしならんと嘲けられ、口惜しさに、後には仙女の戒を犯して時々寺に桃を持歸て朋輩又は沙彌こしやう扈從等へも侑めしかば、皆の者も漸くに五助の言を信じ、我も伴ひ行け誰も見んと五助に附て入るに終日桃林に至るを得ずして空しく歸りぬれども、時ならざる桃を持歸るにて其言の虚ならざるを知り益々乞ひたり。大さ尋常の桃よりも太く、又味も一入美なりとぞ、其五助とは此者なりとて予に引合

されしに、至極質朴の者にして齡は六十餘と言へど顔色頗る若く見えける。予その仙女の事を問ひしに、初めは言ひかねしが、強ひて問ひしかば漸くにして話し出けるに、桃を賜はりしは、いつも笠を被り申、鏡のやうなる物を首に掛けて種々の事を言ひ聞かせ玉へり。此桃林の旦那にてありしか、その後桃を多く盆に入れて持ち又瓢さくべを持ち、琴にてもあり申すか袋に入し物を抱き申せしもあり、その傍に遊べる女子等も皆々首に守袋のやうな物を掛申、何れも往昔の女子達にて有り、その旦那の云聞かせ申せしは、汝一人に來らば何時にても迎へん、必ず人に話す可らず、桃も此所にて喰べて外へは持行くなど堅く戒め申されしを、人々より嘲けられ口惜しと思ひ數度持歸りて人にもたべさせたり、此桃を一顆賜り申置けば、持病も癒り無病になるなり、桃を與へし人も皆無病となりたり云々。

亡靈の恩報じ

寶永五年五月五日、堺町の杉坂七兵衛の後妻が俄に絶死をしたので、灸針湯藥等で手當てを加へたが効驗見へず、皆々あきらめて居る内に自ら息を吹返した。心地はごうであつたかと問ふと、夢うつゝの様に茫然として居ると、鬼の如く恐ろしい物三人怒つた面色で來て、吾が髪毛をつかんで引立行く。如何なる目に遭ふことかと泣喚めいても聞入れず、程なく限りも知らぬ廣野へ出たところ、年嵩さの老媪忽然と現はれ、長い白布を持つて四面を打攘つたら、鬼ども恐れて跡方もなく逃失せた。これは難有ことかな、如何なる人にて斯く救ひ下されしかと尋ねると、我は前妻妙壽なり、二人の兒をそなたが甚いたくいたわり給ふことを冥途にても忘難く、この後も彌よ愛し給へとて堅く約束し此所は冥界である娑婆へ歸られよとて袖そでの中から黒い

粉を出して我が口に入れたと思ふと同時に甦つたのだと語つた。妙壽は元祿十五年六月十日に病死したもので、我兒が後妻に愛育せられるのでその恩義に報ひたものである。(元祿寶永珍話)

生 靈 を 斬 る

加賀の金澤に、享保年代に十兵衛と云ふ青年があつて、江戸へ出て奉公稼ぎをして居る内、夫婦約束をした情婦が出来たが、何年経てか少し銀が溜つたので、單身故郷へ歸り商舗を開いたところ大に當り、半年ばかりでシツカリ繁昌するやうになつたら、呀と叫びさま婦の姿が消えて了つた。

ので、江戸に残して置いた婦のことも自然忘れがちになつたところ、フト夜になると毎晩のやうに夢うつゝとなく江戸の婦が現はれて、早う呼迎へてくれと催促するので狐狸の所爲と思ひつめ、次の夜に現はれたとき、待設けて抜討ちに斬りつけたら、呀と叫びさま婦の姿が消えて了つた。

然るに數日経て、夜の夢に彼の婦が現て来て、男心のつれないことを恨み、能くも自分を斬つたことよとにらみつけ、此れをやるまで髪一握り握らせたと見て目が覺めたが、現在我手に女の髪を握つて居るので、驚いて早速江戸へ出かけ、婦を訪ねると、金澤で斬りつけた夜に死亡して居ることが知れたから、大に悲み、埋葬されてゐる寺へゆいて事情を打明け、墓を掘返して棺から出して見ると、屍骸は胸から脊にかけて大袈裟に斬られて居り、頭髮は元からツツリと剪り取られて居たので、仰天し、その場で剃髪して婦の後生を弔ふた。(享保日記北陸杖)

廁から神隠し

寛延又は寶曆年間のこと、近江八幡の有徳人松前屋市兵衛が妻を娶て平和な家庭をつくって居たが、或る夜更けて廁へ行くのに、常例により、下女に灯を持たせて行き随分長雪隠なので、女房が疑念の嫉妬を發し、自分も廁へ行いて見ると、戶外に下女が欠伸あくびをして待つて居るから、内へ聲をかけて見ると、返事が無いそこで戸を開けて見るに、市兵衛の姿が無い。大騒動をして見たが何日経ても現れて來ないので、此世に亡いものと諦らめ、失踪の日を命日として弔ひ、妻は別に入夫を迎へて松前家を立てることになった。

然るに二十年ばかりほどの後、或る日彼の廁から何者か人を呼ぶ聲がするので、女房が行つて見ると市兵衛が居るが、昔し着たまゝの衣服で坐つて居るので、一家驚動

し、とにかく介け出して譯を聞くけれど、慥かとした返事もなく、何も覺えないやうなことを言ひ、空腹に絶えぬ由を言ふので、食事させたところ、暫くすると着て居る衣服が俄かにポロけ出して埃の如くになつて散り失せ裸になつた。その後市兵衛は病氣や打撲傷などを癒す呪まじないなどをして靈驗を見せて居た。この事は八幡の眼科醫者が眼前見て話した事實である。(耳袋)

(袋耳は徳川幕府の官吏根岸守信の著)

海難での奇蹟

建長元年に、寂淨と云ふ上人僧が支那へ渡るにつけて、兩三度渡支した經驗家の生智

と云ふ雲水が案内者になり、ともく博多から商船に乗つて支那海へと進んで出たところ、数日後に大風浪に逢ひ、船は今にも轉覆しさうだから、乗組の内一百餘人は、傳馬を下ろし、僅かばかりの食糧を携へて之に移乗して、何所へなりと漂着しようとした。

寂淨も生智も傳馬組で、十餘日大洋を漂流する内に食物は盡果てたが、せめては清水があらば尙ほ數日の露命は維げると思つたけれど、水も疾くに盡き、降雨もないので萬策盡きんとして居る。そのとき寂淨が言ふには、船中一齊に觀音經三十三卷轉讀しようではないかと發議し、皆の賛成を得、自分の左手の小指に燈芯を絡みつけ夫に種油を塗つて火をつけ御燈明として一緒に讀經を始めた。これは勿論難業である。小指の皮は灯に焼け爛れて肉に及び、にじみ出る血と膏とで灯も後には消え勝であつたが、とかくして忍び、三十三卷を讀み終らうとすると、奇異なものが人々の眼にうつり出した。

夫れは南方から泡のやうなものが海面約一段歩ばかり眞白に蔽ふほど現はれ出たのであるが、この物が次第に傳馬船へ接近するのであつたから、何かは知らぬが佛の救ひ給ふ手段であらうと心強く眺める内に船の側へ流れ寄つたので、柄杓を出して汲み取て見ると、淡水であるから、驚喜して皆々争ふて之を飲み、活命の思ひに嬉涙にくれた。その内に船が南支那の一角に漂着して無事に上陸をしたが、彼の本船も同じころに他の陸地へ漂着して土着人に救はれ、後に傳馬組の人々にめぐり合つた。(今昔物語)

(海水中から淡水がどうして泡のようになつて盛り上つたか其理由は、靈の作用たるものであるが不信仰な現代科學の教養者は、あり得べからざることであると評するに違ひは無い。けれど超人的の靈は、この位のことをするのは朝飯前の仕事であるのだ)

深坑から救出さる

中古孝謙天皇の時代に、美作國英田郡の鐵山の坑口が崩壊し、逃げ後れた一人の鑛夫が、崩土に坑口を塞がれた爲に、内に閉ぢ込められて了つた。この坑は堅坑である上に、土石の崩壊が夥しく、外部から坑口を掘り開いて救出することが出来なかつたので、棄殺しにされ、坑は廢坑となつた。茲に於て彼の鑛夫の家族は、死者に對する追福の禮を執り、寫經をしたりして七々日を過ごした。

然るに彼の鑛夫は坑内で生きてゐて、毎日救助を待つて居るけれど更に甲斐が無く、追々飢餓に迫つて來て心がいら立ちた。一心に佛を念じ、自分は先年法華經を書寫する願念を有ち乍らまだ着手しなかつたものだ、何卒此の度の危難を救ひ今一度日の光りを拜ましめ給へ、必ず寫經の業を遂げませうと誓ひを立て懸命に祈念を凝ら

した。スルと半日ばかりを經過したと思ふころ、坑口の方に方り、塞がつてゐる土砂に、小指ほどの虧隙が開いて坑外の天日の光りが微かに窺はれるやうになつたので嬉しやと見ると、やがて其小穴から一人の僧形の人が潜つて來て、何物であるか能く知れぬが、食物を一品與へてくれたので、拜戴して喰べると、少し空腹の苦みが癒へた。そのとき僧形の者が言ふには、汝の妻子が汝の爲に七日毎に法事を營み、吾れに食物を供へてくれたから、夫れを汝に持つて來て與へたのである。汝は暫く辛棒して待つて居れ、必ず助けてやると諭してから彼の崩土の間の小穴から外部へ潜り出た。

鑛夫はこの僧を觀音の化身であらうと想像し、愈よ信心を凝らして祈願をこめて日を送る内に、彼の穴が次第々に大きくなり、深い坑底から仰ぎ見ると蒼空が判然と見へるやうになつた。能く積つて見ると、穴の廣さは三尺内外で、人の出入りが自由であるらしいけれど、高くて坑底からは攀ち登ることは出来ないから策の施しよ

うが無かつた。或る日その邊の村民二十餘名が葛羅かづらを採りに奥山へ行くとき此廢坑の口近い所を通行した姿が坑底から見へたので、底から助けを叫んだ。人々はこの聲を聞つけて、試みに石に長い葛をつけて之を坑の中へ下ろして見ると、その葛を引張つた。そこで人々は勢ひづき葛にて籠かごを急造し繩をつけて坑底に下ろしてやつて、乗らせて救揚げたが、五十餘日目の活命であるので國中の高評となり、諸方の製紙業者が争ふて寫經の料紙を寄附する、また寫經を助けてやる人も續出し、日ならず素願の法華經が佛に上られた。(今昔物語)

金毘羅信者の奇蹟

文化年間のこと、阿波國の商人が、備船にて商品を江戸へ送ることがあつて、監督かんさくとしてその長男を附け、乗組は船頭以下二十餘人で出帆させた。然るに船頭が悪心を發し、沖へ出てから水夫長を共謀に引込み、腹心の水夫をして夜分に荷主の柵を礎いしに括りつけて海中に投込ませ、大阪に寄航して荷物を賣飛ばして大金を着服した。而してわざと日數を経てから、元へ戻つて来て、航海中に難船して商品は海へすり、監督も不幸にして波に奪はれて了つたと報告した。

一方、海に投込まれた監督は、一時は何事も辨へず、死人同様になつて居たが、そのとき荷主の宅の戸口に何物か強かに打當つたので、家から主人が出て見ると、大礎おほいしに長男が括りつけられて濡鼠の姿で人事不省で居るので、大に驚き種々と介抱をし

て息を吹返へさせ、仔細を問ふて船頭らの悪計を知つた。そこで其子を一室に隠して他家の人に秘めて置き、船頭等の歸還するのを待て居ると、日を経て彼等一同が戻て来て、洋中で颶風はやてに逢ひ危急に迫り、帆綱を切斷するとき、當家の子息が誤て帆綱に叩かれて海中に落込み、救ひも及ばず溺没され、積荷の過半も海波に奪はれたりと報告し、空涙を流して愁傷を申述べた。

その時荷主は濕やかに挨拶をして、手前の不幸は何も運命とあきらめる、多數の人々が斯く無事で歸還し得たのは目出度い事だに依て喜びの酒宴をすると言ひ、一同を表座敷へ通して酒食を振舞ひ油斷をさせ、その隙に内密に役所へ訴出で、捕吏をして居宅を取圍ませた後、主人が出て、今日の酒興に珍らしい殺さかなを出すから喰べて下さいとて奥から悴を連れ出したら、船頭以下色を失ひ逃さうとしたところを捕吏が一綱打盡に捕縛したが、船頭一人悪運強く遁れて行衛を失つた。荷主の一家は琴平神の熱心な信者であつたので、神が悴せがれを助けたものであると疑はず、直ちに御蔭

詣りをして活命の恩を謝したが、この事は當時の高評事件で、多くの著書にも載せられた。

絶 怪 な 靈 罰

徳川幕府の初世期の寛文年間に、伊勢國一志郡なる川俣河の劍の淵と稱せられる難所に於ける人跡の及び難い懸崖の中ほごに、かねて方一丈餘りの岩窟があつたが、或る日その岩窟内に人間が吊り下つて居るのが、對岸の家城と云ふ部落から見附られた。

村民は大に恐れ怪んで評定をしたが、とにかくこの儘には見過し難いとして、筏を組ん

で大勢それに乗り、淵へ近よつて彼の岩窟内を見上げると、三十歳計りの婦人で、頭髪の末端が岩窟の天井に膠着して體軀が中^{ちゆう}ブラリに吊下つて居り、死人同様の態^{まゝ}である。

どかくして夫を引下ろしにかゝつたが、髪の毛は何の異情も無いのに恰も漆^にか膠^かかの類で固く粘着させられたものゝ如くに岩窟の天井に密着して居たので、髪を中途から剪^{きり}断つて體軀を抱き下ろした。かくてその婦を部落に運び歸り、種々に手當を加へたら、漸くのことに蘇生をしたので、何所の者かと訊ねると、唯だ美濃國の龍ヶ原村の庄屋の女房とのみ答へて、その外のこととは何も言はなかつた。

(事情を語らぬのは、語るを耻ぢてか、何も意識しないのか不明である)

この婦のことは、早速領主藤堂侯の廳に訴出られ、公牒で美濃龍ヶ原の領主へ通知になつた結果龍ヶ原から村民が多數迎ひに来て連れて歸つた。(甲子夜話)

(この事情は面白い事實を含んで居るに相違は無いけれど、今日では調査の道が無いが、多分彼

の婦人は不貞腐れて、天狗の冥罰にかゝつた事であらう、あのやうな怪奇は天狗の所爲に限つて居る)

不可解な光り物

空中を飛行する夜間の光り物の中に、電氣や、流星や人魂や瓦斯の化學的燃焼の外に一種不可解な光り物がある。文化年間、平戸老侯松浦靜山の思出書きに、幼時江戸鳥越の邸にて、群童が日暮方に竿で蝙蝠を撲つのを見て居たとき、青色の光り物が尾を曳いて飛來ると、群童が人魂が來たとて竿で打落したところ、地に墜ちても猶ほ光つて居るので、兒童らは寄て履物で踏みになつて見ると、豆腐の滓^{かす}の如きものであつた云々。

また『怪談老の杖』に武藏多摩郡本郷村に西心と云ふ道心があつたが、そのころ毎夜東方の丘陵の上から、小さい提灯ほどの光物が飛出て、向ふの山へ行くので、村民が恐怖してゐたが、或る夜數名の元氣漢が、道心を先頭に立て、田の中へ坐つて待つて居ると、深更に光り物が飛んで來たので、道心が笠を以て押伏せて見ると、意外にも石塔の破片で、年號がかすかに讀まれて足利義政時代のものらしくあつた。道心はそれを我庵に持歸つて現に今にあり云々。

柳川淇園の隨筆に、河内國で或る夜群兒が、空中を飛ぶ光り物を竹竿で打落して見たら、墓であつたと記してある。現代人に言はずと、軽い羽毛類ならイザ知らずそのやうな重量物が空中を飛行する理法が無いとて事實を否認するであらうが、墓と云ふ怪蟲ならば、たしかに空中を光り乍ら飛び得る可能性を有つてゐる。

（拙著動物怪異譚に詳記）

無風の静夜に、空氣の何十倍の比重物が獨りで空中を飛行した事實が現代にもある。

著者が學生時代のこと、郷里の桐岳寺と云ふ寺の長老が、或る夜更けて庭を歩るいて居ると、裏山の墓地の方から本堂の横へ向けて、身邊近く光り物が飛行したので、躍り蒐て手で掴み取つて見ると、何かは知れず冷たいグニヤリとしたもので、豆腐でも握りつぶした手觸りで、甚だしき腐臭のするものであつたから、直ぐに水で手を洗つた。何物であつたか不明であるが、墓地から飛來したところを見ると或は死人の脳味噌であつたかも知れぬと話したことがある。それも果して然るや否は不明であるけれど、重い固體が、空中を飛行することは事實である。

空中を逆提にされた人間

文化年間のことらしい、讃岐の高松侯松平頼聰の幼年のとき或る日侍臣數名で紙鳶を揚げて居るとき、空中七八十間の所を、人間が大の字型に逆まになつて叫喚し乍ら急速力で頭上を通り過ぎたのを一同で見た。その人間は着衣がまくれて面部を覆ふてゐたけれど、足部の色の白くあつた容子が婦人らしく想はれたと云ふことを松浦壹岐守が高松侯の侍臣から聴取して書き止めて世に公けにして居る。

著者は數年前、三重縣南牟婁郡の人内山氏から、文化年代のころ其郷里に於て略右と類型の怪事があつたとて語つて曰く、幼少時に祖母から詳しく咄れてゐたけれど、今は僅かより記憶しないが、長島村であつたと思ふ、非常な悪婦があつて姑を虐待すること甚しくあつたところ、或る日體が逆まになつて空中へ揚つた。恰も何者に

か提げ上げられた如くであつたがやがて叫喚して血潮をダラ／＼と地上に墜しつゝ、空中を走るので、村民は恐れて一人も外出する者が無く、程經て漸く集つて來て血痕の跡を逐ふて尋ね行つたけれど、遂に行衛が知れなかつた。村民は天狗が引裂いたのであると想像した云々。内山氏もその祖母も今は故人であるから、詳細を審にしがたいのは遺憾である。

利仁將軍を呪殺す

文徳天皇の御代に、新羅國へ牒令を發したところ、用ひなかつたので、討伐軍を起し、鎮守府將軍藤原利仁を大將として、各道より兵を徴して渡海の準備を爲さしめ

た。新羅王は之を聞て大に驚き、兵力を以てせば敵し難くと思ひ、支那から真言の密法に精通した濺全なる僧を聘し、敵將調伏の法を佛前で修せしめた。折ふし渡宋してこの僧に師事してゐた我國の三井寺の智證は同時に師に附隨して新羅に行つたが、師の僧の修する三寶の秘法が母國の軍將に關することを知らずに師の業を替けてゐたのは遺憾であつた。

さて調伏の修法七日に満ちた折り、壇上に多くの血が泛びたので濺全は法驗を察知し結願して宋へ回つて往つた。一方我が利仁將軍は出征に臨み病氣を發して山崎にて病臥の身となつたのであるが、彼の宋僧調伏滿願の日に、何物に驚いたか俄然病床から蹶起して、虚空に向ひ、太刀を抜き躍り上り／＼して斫り附ける状態を續け、遂に昏倒して死亡した。利仁の死に依て遂に新羅討伐軍は沙汰已みとなりたところ、その後智證が支那から歸朝し、新羅に渡つたことを語りし爲めに、人々は利仁の變死は調伏の爲なることを初めて知つた。(今昔物語)

非情物の精

【解題】

非情物、殊に器物などにも精があるのがあつて或る場合には、人間に交渉をするのは驚くべき事である。精には強弱があつて、その悉くが現はれるのではない、現はれるのは極く稀有であることは勿論であるが、明治以來に於ては聞くことが無いので現時の人は之を信じないけれど、昔しはチヨイ／＼あつたもので、その傳説は文書にも載つて残つてゐる。何故に昔にはあつても近代には無いかと云ふと、是は實は、近代現代にも有るであらうが、人の念に無いことである爲めに、精の現象として傳説しない爲に、無いと云ふことに見做されるところと著者は想像をして居るのである。

現に第一編所載の、獨りで繪を書いて居たプランシエットは小間板の精の作用であると云ふことが出来る。丹念に調査をするなら、屹度現代にも事實があるに相違はない。

例一 鬼瓦の精

文化二年八月、江戸の下谷に住んで居た谷文晁の家で、下女が毎晩悪夢に魘うなされて騒ぐのであるが、その悪夢なるものは、鬼の夢であつた。或る日文晁が少し氣附いたことがあつたと見へて、下女を呼んで、おまへは夜分に手水に往くのに、廁へ行かずに途中でするのでは無いかと訊たづねたら、下女は、イ、エ私は必ず後庭の便所へ行つてしますと答へた。

そのとき文晁が、おまへは隠すのだらう、隠すと罰が當るぞ、隠さず言つて了へ、多分庭の出口にある柂もちのきの元へするであらうがどうだと言つたら、下女が服して、如何にもそこへやります、便所へまでは恐こはくて行けませぬからと白状した。そこで文

晁は命じて柂もちのきの根本を掘らせて見ると、奈良の二月堂の鬼瓦が出たので、夫を洗ひ淨めて床とこの上に置いて見た。爾來下女が悪夢に襲はれなくなつたさうだ。

(寫山樓之記)

例二 杖の精の忠義

正徳年中のことである。豊後國豊岡の城外に山田物外と云ふ隠士が在つて、常に曲つた竹の杖を愛用し、何所へ往くにも夫を離すことは無かつた。或る日一僕を供に従へて、城下から三里ばかりの所の某寺を訪ねて、住持と清談しその夜は寺で泊つたところ不思議な夢を見た。

その夢は、主従が野路に迷つて居るところへ、若い背せの高い男が出て来て、甚だ馴々しく、あなたは何所へお越しになるかと問ふたので、汝は誰かと反問をすると、自分あなは朝あさな夕ゆうなにあなたの傍を離れないものであるのにとくくしいお訊ねだ。あなたは路にお迷ひであるらしいが、私の後からおいでなされとて先導をするから、怪

しく思ひ乍らその後随いて行くと、傍の崖が俄かに崩れて下に牛が物に押しつぶされて死んで居ると云ふ夢であつた。

翌日物外は寺を辭して歸路に就いたが、主従兩名道を誤つて大に困つて仕舞つたとき、夜前の夢のことを思ひ出し、道に迷ふた人は、杖を立て、知るべしと云ふ事もあるだらうと氣附いたので、彼の常用の杖を地上へ立て、念じ乍ら杖の倒れるのを見ると、自分等の考へとは異つた方向へ倒れたので、怪しみ乍ら、ともかくもその倒れた方向へ進むことにした。

かくて暫く歩いてゐると俄然大地震が揺り出して、見る／＼今しかた來た道が崩潰したので、主従は懸命に先方へ進んだら、夢で見た通りの場所があつて牛が崩土に打たれて死んでゐた。夫から漸くにして我居所に歸着して見ると、我家をはじめ附近の人家が悉く倒潰してゐたので、杖に助けられたものたるを知り、囊を新調し、箱を製つて之に容れて大切にし、子孫今に之を敬ふて神の如くに扱つて居る。(怪談老の杖)

右の事例は、比較的近代の事に屬するが、ズット舊く平安朝から鎌倉時代にかけて、物の精の傳説が可なりある。今その二三を摘記する。

例三 蹴鞠の精

鳥羽天皇の朝に、侍従大納言藤原成通と云ふ古今無雙の蹴鞠名人があつて、前後十九年の永い間、グラウンドに立ち、其間或る二千日間はその一日も休んだことがなく鞠を蹴つたと云ふほどの熱心家であつた。

右の二千日の最終日には鞠の供祭を施行し、夜分に書齋に於て、日記を誌さうとして燈臺を近く引寄せ、墨を磨つてゐるとき、棚の上に置いてあつた秘藏の鞠が面前へ轉び落ちたので、怪しく思つて側を見ると、異様なものが現はれて居る。

恰も三四歳の小兒はごあつて全身に猿の毛の如き毛が生へて居るものが三個連合して、今落ちた鞠の括り目のところを抱いて立つてゐる。成通は驚きさま、何者だと荒々しく問うたら『鞠の精です、昔から貴方ほどに鞠を好ませ給ふ人は無く、今日

の二千日の供祭に、種々の物を給はつたお禮や、身の容子や鞠のことどもをお話したくたくと罷出たのです、先づ自分等の名から知ろし召しなされ、是御覽』と云つて、眉の邊へ垂れかゝつた髪を押上げた。

見ると、彼等の額に各々の名が現はれて居り、一個は春陽花、一個は夏安林、一個は秋園と云ふ字で、何れも金色に光つてゐた。ソコで成通は驚きを強くし、鞠の精なるものに對ひ、住所は何處かと訊ねたら、鞠をお蹴りのときには鞠に附くけれど、平素は柳の蔭に住んで居る。總じて蹴鞠の好まれる御代は國が榮え、好む人には福があつて長命で、後世までも良いと言つた。

後世まで良いとは腑に落ちかねたので、どうして後世までも良いかと問ふたら、人間の身には、一日に何度も悪念が起つて皆罪となるものだが、鞠を好ませられて庭に立ち給ふ限りは、鞠の外に念が無いによつて自然に罪も少く後世の縁となるのだ。今後お鞠のときには、自分等の名を唱へ給はゞ、木傳ひに参りて宮仕へを致しませ

う、爾今は斯るものありと御心に懸けておはしますなら、お護りとなりて益々術に精しくなり給ふであらうと云ふことを告げて姿を掻消して了つた。此事があつて以來は成通の鞠術が一層精妙となり、人間業では無いことが數々現はれた。

例四 手提の精と水の精

今昔物語から左の二事を抽く。

(A) 今は昔、東三條殿に式部卿の宮と申しける人の住給ひける時、南の山に長三尺許りなる五位(五位の衣冠を着けた人)の肥りたるが時々行きけるを御子見給ひて怪しみ給ひ、陰陽師を召して占はしめられければ、陰陽師、此れは物の氣なり、但し人の爲に害を爲すべきものに非らず、銅の器の精なり、宮の辰巳の隅の土の中に有りと占ひ申たりければ、占に當たる所の地を二三尺許り掘りて求めたるに無し。陰陽師尙ほ掘るべきなり此の占違はずと申ければ、更に五六寸尺許り掘る程に、五斗納許りなる銅の手提(バケツの類)を掘出したり。この後より此の五位の行くこと絶にけ

り(中略)物の精は此く人に成て現する也けりとなむ。

(B) 昔し陽成院の御ましける所を、後に冷泉院の小路を開て、北の町は、人家ごもに成りて、南の町にぞ池など少し残てありける。それにも人の住ける時に、夏のころ、西の臺の延に人の寝たりけるを、長三尺許りある翁の來て、寝たる人の顔を搜りければ、怪しと思ひけれども、恐ろしくして虚寢をして臥したりければ、翁やがて立去り行くを星月夜に見遣りければ、池の汀にて搔消すやうに失にけり。

池掃らう世も無ければ、草滋りて怖ろしげなり。其後、夜々來つゝ撫でければ、聞く人皆恐合たる程に、膽太く勇みたる者あつて、いで己れ事、顔搜るものを捕へむとて、その延に唯獨り苧繩を具して臥して終宵待けるに、夜半過ぎし程に、待かねて少し睡りたりけるに、面に物の冷やに當りければ、急に覺めて起上つて捕へつ、繩にて唯縛りに縛て高欄に結付け、さて人に告げれば、人集て火を燈して見しに、長三尺許りなる小翁の淺黄上下著たるが、死ぬばかり強く縛られて目を打叩て有り。

人もの問へども答へず。暫くあつて少し笑つて、彼此見廻して、細く佗しげなる聲にて云く「盥に水を入れて得むや」と。

然るにより、大なる盥に水を入れて前に置たれば、翁頸を伸べて盥に向て水影を見て我れは水の精ぞと云て水にヅブリと落入ぬれば、翁は見へすなりぬ。されば盥に水多くなりて、鉉より溢る。縛たる繩は、結ばれ乍ら水にあり。翁は水に成て溶にければ失せぬ。人みな此れを見て驚き奇びけり、その盥の水は、溢さずして搔いて池に入れにけり。それより後、翁來て人を撫でること無かりけり。

例五 盆栽梅の精

徳川中世のこと、江戸の駿河臺に梅屋敷と稱せられて、多くの梅の鉢植を有て名を得てゐた山中平吉と云ふ武家があつたが、病氣で難儀をし、次第にたのみ少くなつたところ、或る夜の夢に、一人の童子が現はれ、自分は數年厚恩の養ひを受けて居る者であるが、此たび御身の病氣は常業で死に當つて居るので、自分は恩報じに御身

の一命に代はることにした。さり乍ら目今の醫師の薬では無効であるに依て、御同役の篠山吉之助殿へたのみて別なる醫師を招きその治療を受け給へと告げて夢が覺めた。

不思議に思つてとにかく夢に従はうと思ひ、翌日篠山方へ使をやつて招かうとすると、篠山がやつて来て、前夜夢に誰とも知らず貴君の病床を訪ねて服薬の用談をするやうにと知らしたので、氣にかゝつて来たと言つた。そこで兩人は夢の符合に感じ、相談の上で醫師を替へて見ると、病氣が日々快方に赴き日ならず全快をしたが、奇妙なことには、病氣がよくなるに連れて、平素最も愛賞してゐた鉢植の或る梅が日々衰弱し、終には枯死をしたので、此梅の精が身替りになつたこと、感じられた。(耳袋)

稀代な神隠し

〔解題〕

神隠しなるものは明治以來、各地に跡を絶つたことであるから、現今の人は、神隠しを以て古人の迷信と断定し、心理學者輩は、精神上の病的發作^{はっさ}で、自分で山野を迷ひ歩るき乍ら、天狗に連れられて各國を飛び廻つてゐたやうな氣分になつたのだなご説明をするのが常である。大正十年に群馬縣の某農村で、六才の兒童が俄然行衛が知れなくなり村民が大搜索をしたところ四日目に三里餘の山林内で發見されたときに、土地の新聞が神隠しに逢ふた兒童と題して掲載するところがあつた。スルと東京の某心理學者の一派が實地へ臨んでその兒童を調べたところ、最初何人か遊びに行かうとて連れて行つたのでついて行き毎日面白く山の中で遊び、夜は犬と一

緒に寝てゐたと言つたのに對して、それを誘つた人なるものが發見されないとして兒童の幻覺だと見做し、又犬と一緒に寝るなどのことは、あり得べからざることだとして、是も兒童の妄想又は妄語にして仕舞ひ乍ら。その子供の袂たもとの中には獸類の毛があつたのは、何の爲めだかわからぬと附け加へてゐた。

すべての怪異を變態心理の發作として解釋することしか出來ぬ幼稚な唯物學者の神隠し調査は、右のやうなものである。否な彼等は實は、モット神祕的な口供を彼の兒童の口から得て居たかも知れないけれど、學者なるもの、頭腦が夫を受入れない爲めに、夫を捨て、了ひ、唯だ人世にありがちな事實ばかりを採用したのかも知れない。彼の兒童の袂の中にある獸毛は、その兒と一緒に寝たと云ふ犬の毛であるかも知れぬが、その犬は全くは狐であつたかも知れぬ、又その狐が、最初、人に化けて彼の兒童を誘引したかも知れぬ。そう云ふ想像を下すところの兒は神隠しに逢ふたのではなく狐にばかされてゐたのであらうが、彼の心理學者の一派は、かねてその機

關雜誌で、狐狸の妖を迷信だと力説してゐる手前もあり、又眞實に左様思つても居るからして、右の兒童を狐がばかしたと云ふことに想ひを寄せなかつたものと見るが適切である。(狐狸が人をばかす實例は別項にあつて確實なる現象である。狐狸の妖まようを知らない人や之を信せぬ人は、經驗不足なものと、研究材料がボロであるのと、唯物科學過信の業であるのだ)

吾人が云ふ神隠しなるものは、狐狸に誘引された失踪者どもを云ふのでは無い。冥界の生者たる天狗、陰鬼などに誘拐されたのを云ふ。左に引例をするのは、怪奇を極めたものだけれど、出所の慥かな事實で、神隠しなるものを認めない現代の淺識家を誨をしへるに足るものである。

文化十三年、江戸の南鑑町に神職の下役をしてゐた野山種麿と云ふ漢字の心得のあつた人物があつて、時々平田篤胤方へ行つて神道の教へを受けてゐたが其息子の多四

郎と云ふ少年が、五月十日頃、その母の里なる芝日蔭町萬屋安兵衛方へ泊りに行き
或る日釘を踏貫いて病臥をしてゐた。

スルと五月十五日、日が暮れて燈火をともし頃、痛む足に木履を引ツかけて裏の便所
に行つて小便をしてゐたが、呀と叫ぶ聲がしたので、安兵衛等が出て見ると、多四
郎の姿は見えないで、片袖が千切れて落ちて居り、又その穿いてゐた木履が空から
屋根の上へ落ちたから、人々が驚いて聲々に呼び立て、見たが返事がない。茲に於
て天狗が擱んだものだとして親の種磨方へ急報をした。種磨はすぐ駆け附けて見る
と、近所の人が大勢集つてゐて鉦や太鼓で捜がしに出ようとして騒動最中であつ
た。之を見た種磨は人々を制して、天狗に捉えられたものなら、普通の手段では捜
がし出すことは出来ぬ、徒らに人々を勞することは心苦しいから止めるやうにと言
つたけれど、人々は騒ぎ立て、探索に出た。

種磨は我家へ歸り、家族が悲歎の涙に暮れてゐるのを慰め、自分が今祈り返して見せ

ようから泣くに及ばぬとて、髪を解き亂し裸になつて水垢離を取り、二階の神棚の
前に畏り、熱誠こめて八百萬の神を呼ばはつて祈禱を始めた。其文句は、我れ卑し
くも深く神の道を尊とみ神の恩頼をかたじけなみ、心を正しうする事は申すに及ば
ず、一日も神拜を怠らず祈り頼み奉るに、今我子に斯る災害ありては、たのみなき
に似たり、且つは世の痴者どもが後指ささむも耻かし、吾が耻は神の道の耻ならず
や、明日とは云はじ、今速く我が子を返さしめ玉へと大聲に繰り返し、汗水にな
り躍り上り、五時間ばかり祈りつゞけて精根を盡くし、夜明けに及んで、腹が空
いたので、二階から下りて食物戸棚から飯櫃を取出し、二碗ほど食ふと、慌た
だしく門を叩くものがある。

誰かと聲をかけると、萬屋からの使者であるが、多四郎ごのが唯今歸られたけれど、
氣絶して居られる早く來給へと呼ばはつた。仍で種磨は大に歡び、神明に謝詞を奏
して、近所の醫師を連れて、大急ぎで安兵衛方へ驅付けて見ると、一室に横たへて

ある多四郎は死人同様で、人々が呼び生かさうとして呼び立てる最中であつたので顔に水を吹きかけ、醫師の氣付け薬など嘔ませると、少し體を動かしたので、種磨が其れを抱き起こし多四郎心を慥かにせよ父であるぞと三聲ばかり呼びつけたら、クワツと眼を開け、父上か辱なし、唯今歸り來たことは偏に父上の御蔭であると言つたから、どうしたと問返したら、恐ろしさに今は語り難いと戰のいて言つたので暫らく安臥をさせることにしたら、二晝夜ブツ通しに寝たが折り／＼目を開けて、ア、恐ろし／＼と叫んだ。

同夜多四郎が如何にして萬屋へ歸つたかと云ふと、夜の二時頃に、屋根の上に凄まじい物音がしてからウンと云ふ切ない聲がしたので、萬屋の家内が戸を開けて見ると、庭から多四郎が轉ろげ込んでそれなりに氣絶をしたのであつた。さて三日目に多四郎は正氣づいてから下の如くに告げた。彼の夜、痛い足を爪立て、小便をして居ると、髪を垂れた大きい男が何所からともなく來て、サア來いと云ひさま、強く

腕を捉へたので、振り放つたら、小賢しな奴めとて両手で首筋を掴んだと思ふと、屋根の上を経て空中に引ツ張り上げられたので、とても敵はぬと思ひ、息をつめて其れなりになつてゐたが、忽ちの間に清らかな山へ行き着て下ろされた。そこには寺の如き建物があつた。萬屋から提げ出された時は日が暮れて居たのに、此所へ着いたときは尙ほ日の餘明があつた。

よく見廻はすと物凄まじいこと言ふばかりなく、山伏のやうなものや僧侶の如うなもの又は俗態の人などが澤山並んで居たが、上座に居るのは眼の光つた恐ろしげな老僧であつた。而して自分を連れて來た山伏態の男が、自分を彼の老僧の前へ出して強めて頭を垂れて禮拜させた。自分の傍の方には、自分ばかりでなく、十二三歳の童子を二人連れて來た長髪の男も居つた。此所は天狗の巢窟だと知ると悲しくなつてやるせが無いので、どうぞ返して下さいと泣き乍らたのむと、彼の男が黙れ／＼とて頭を押さへつける。夫にも屈せず返して下さいと連りに哀願をした。フト頭を

上げて上座の老法師を見ると、大層恐れれた形相で耳を傾けて何か聞入つてゐるさまであつたが、彼の男に對ひ、子供等を使ふ用事があつたので彼れを連れ來さしたけれど、彼れの父が神だちへ嚴しく祈る聲が遠音に聞へる、やがて神の仰せがあるぞと言つたので、自分も耳を澄ますと、父上の神を祈り玉ふ聲が風に連れて耳に入つてよく聞える。そこで、彼の長髪の男が、自分に黙れ〜といったのは、上座の老僧の聞き耳を妨げさせまいとて言つたことゝ知れた。自分は老僧の心の動いたのを知つて、愈よ、返し給へと乞ふたのであつたが、座中に五十歳餘りの人と二十四五歳の兩名の俗態人があつたところ、其五十歳餘りの人間が老僧に手をついて、此小悴は我等の緣故の者にて候何卒赦して返し與へ給へと願つたら、老僧が肯じて、夫では歸つてもよろしいと自分に許しを出した。自分はどうして一人で歸られませうと言つたら、老僧が最初の男に對ひ、送つてやれと命じた。そこで彼の男が自分を捉えたど見ると忽ちに大空にかけ昇つたやうに記憶をするが、その後のことは何も知

覺をせぬ云々。

多四郎の右の物語りを聞いた安兵衛や多四郎の母が、彼の五十歳位ゐな男なるもの、容姿を委しく尋ねて大に驚き、夫は今から二十年前、寛政九年九月廿四日吾々の姉の萬屋萬右衛門が、安兵衛の弟の藤藏なる七歳の兒童を連れて小石川の臺町から芝の愛宕山へ參詣をしたまゝに行衛知れずになつたので、巫子に口を寄せさせて問ふたら、今は二人とも、人の見得ざる所に使はれて歸ることが出來ぬ。但し二人は折り〜そなた達を見かけるけれど言葉を交はされぬ掟の爲めに支へられて居ることであつたが、さては其五十歳餘の男は萬右衛門で、二十四五歳の男は弟の藤藏が成人したのであらう。多四郎をゆかりの者と云ふはこの故であらうと斷定をしたので人々が更に驚きを重ねた。(平田篤胤全集)

姿を見せぬ旅行者

慶長十七年に、従僕を連れて旅行をする者が周防國で民家に一宿をしたが、その者は従者に臺所の用事などを命ずる聲ばかりして、一向に姿が見えない人物で、而かも一人でなく數名らしい聲であつたから、宿の人が不安心に思ひ、密かに地頭の方へ届けて出た。

仍て地頭所ぢとうしょから役人が出向して来て、ようすを窺ふどころ、如何にも、聲ばかりあつて體が見えぬから、此奴こやつは狐狸の人に化けたものでもあらうかと疑ひ、地頭方へ飲食に招いて見ると、好意を喜んで早速出て行つたから、地頭の家では、酒肴類を出して馳走をして見ると、通常人の飲食すると異らぬ膳部の減り方で、一向に食事の作法上の間違がない。けれどもとにかく姿が見えないことは奇怪なるによつて、

犬の健やかなのを八九疋連れて来て座敷へ入れ、戸を外から閉て仕舞つた。

然るに多くの犬どもは縮み込んで仕舞つたらしく、あまつさへ後にはギャン／＼悲鳴を擧げるのは鞭の類で打たれるやうであつたので、戸を開いたら、犬は散り／＼に逃げ出した。其とき、彼の見えない客人が、自分等を狐狸の類と心得られて、異様な振舞ひを致されたのは心外だとして不足を言つて宿へ歸つたが、その座敷には、何所から提げ込んで来たものか犬を打つたらしい鞭が二三本残つて居たので、地頭は益々奇怪に思つた。やがて客人の方から、振舞はれた禮謝だとして、錫の酒入れに美酒を詰めたのを贈て来た。その酒は多くの人々が集つて飲んだのに、いつまでも出て来て容易に盡きなかつた。此怪人物何者たりしことは遂に判らなかつたさうだが多分武人の仙人になつたものであらう。(當代記)

人體の空中飛走

【解題】

重量ある肉體人が機械力を藉らず、肉身のまゝにて空中を走ると云ふことは、念力で物體が空中に浮揚する理法と同一の徑路に據るものである、我國に於ける空中飛走者の傳記は、役行者えんのぎょうしや以來少くないけれど、餘りに古い者や、人口に膾炙したもので、信據し難きものやは採らぬ方針にて左に引例をする。尤も引例中には、自身では空走の力が無く、或る空走可能者に拉し去られて遠地に誘はれた事實も多いが、是は可秤體かへうたいが萬有引力に逆ふことを得るの實例たるに適するからのことである。

(卷末解説欄参照)

例一—長清道士

應長年代に、上野國の金洞山の巖窟を住家として、仙道修行に入つた長清道士と云ふは、その俗名は知り人がないか、以前は北條氏政の家臣であつて、父の讐あだを殺してから、人世を捨てる氣になつた人である。彼れは金洞山に入て木食し異常な精勵せいれいを以て仙道を修め、遂に神通力を得るやうになつたのである。後に里人が崇敬するやうになり、病氣があると山へ行つて靈法を授かつたり、家へ道士を招聘して治療をさせたりするのであつたが、まだ道士の空中飛行のことを知つたものは無かつた。或るとき道士は、山麓の農家に招かれて行き、その家の病人に病快の呪文を授けたとき、唯今、山へ人が来て呪文を乞はんとして居るものがあると獨語し乍ら、庭の柿の木に登つたので、家人が、柿の實がお好きなら採つて差上げようとして、道士の後から木に攀よち上りかけるとき、道士は梢から突然空中を踏んで風の如くに金洞山をさして飛行し去つたので、人々は非常に驚き、其後は神の如くに尊敬をした。

金洞山の道士の巖窟へ行つたことのある人の話に、或る夜、烈風暴雨が俄かに至り、

丘壑鳴動する中に、鬼神の號哭する雷のやうな轟聲が頭を壓するので驚いて居ると、道士が聲を勵まして夫に對して叱責をしたら號哭の聲が俄に止んだので、何事であつたかと問ふたら、眷屬に違法者があつたので之を責罰したのであると答へたさうであるが、道士には一疋の犢が晝夜隨從してゐて、種々の用を辨じ、時としては熊や狼も來て道士の膝下に馴れ臥すこともあつた。道士は延寶年間に百四十八歳で入定をしたが、彼の犢も同時に死んで仕舞つたと云ふ奇蹟がある。

例二 六時間に百五十里

徳川時代の明和年中に、讃岐の高松在から彦次郎と云ふ青年が、江戸へ奉公に出で、某武家の目黒の下屋敷の番人になつたところ、その年の九月廿八日の午後四時頃に仲間の番人が不在となり、彦次郎一人になり、心寂しく故郷のことを思ひ出して居るとき、何所から這入て來たのか、一人の坊主姿の男が傍へ來て、おまへは故郷へ歸つて見たくは無いかと言つたので、折角在所を戀しく思ふてゐる所であると答へ

た。

スルと坊主男が、夫れでは直ぐに連れて行つてやると言ひ乍ら片手で彦次郎を抱へたと思ふと、彦次郎は早くも其坊主と共に庭の外の空中に在つたから、夢地を辿る氣がした。そのとき坊主が、おまへは目を閉ぢて居れ、見て居るとよく無いと言つたので、正直もの、彦次郎であるから、すぐに目を閉ぢたが、軀に當る風は矢で突くやうに鋭く、耳は鳴り響いて居た。兎に角たゞごとでは無いと思ひ乍ら、坊主の脇に懸命に取つて神を念じて居ると數時間後に、おまへの家へ來たぞと言つて地上へ下ろされたが、彼の怪男子は何所とも無く立去つた。このときは夜の十時頃で、場所は我家の裏庭であつたが、丁度父親は小用に出かけたときであつたので、彦次郎を見付けどうして歸つたかと訊ねたから、右の次第を語ると、大に驚いて直ちに組頭へ届け、組頭からは江戸へ通牒を發したところ、相違は無いとのことになり、官からの咎めも無くて濟んだ。

例三 男の天降り

文化七年七月二十四日の夜、江戸の浅草、南馬道竹門の傍へ、禪もせぬ赤裸の二十五六の男が、空から降りて来て、茫乎として立て居るのを、町内の若者が湯屋から戻るとき之に遭遇し、驚いて駆け逃げようとしたら、裸男が地上へ倒れた。

そこで若者はこの状況を町役人に告げたので、諸人が駈つけて見ると、彼の裸男は死人同様になつて居るので、番所へ兇ざ入れ、介抱をなし、醫者を招いて診察させると、別に怪俄も何もないが、大層疲勞して居るから、暫く休憩させるが良からうと言つたので、皆がそのまゝに傍らで番をして居ると、暫時にして彼の男が正氣づいて頭を擡げたから、人々が事情を問ふたら、左の事を告げた。

此男は京都の油小路二條上るの安井御門跡の家臣、伊藤内膳の長男安次郎と云ふものであるが、去る十八日の早朝、嘉右衛門と云ふ友達とその僕庄兵衛と三人連れで洛北の愛宕山へ參詣をしたところ、仲々炎暑の日で、山上で裸になつて風を受けて涼

んでゐたが、そのときの着物は、花色染めの四ツ花菱の紋をつけた帷子に、黒絹の羽織、及び大小の刀であつた。そのとき一人の老僧が傍へ来て、面白いものを見せるから疾く来いと云つたので、裸身のまゝその僧の後に隨いて行つたやうに記憶するばかりで、夫れからの事は何も知らぬと告げた。

右の如く語つてから、人々に向ひ、此の所は何所だと訊ねるから、江戸の浅草だと知らせたら、驚いて瀕りに涙を流して居た。とにかく人々は奇怪に思ひ、その男の穿いて居る足袋を見ると、京都製の足袋で、少しも泥土がついて居ないから、空から下された事は事實であると見做された。さて以前にも是に似寄つたことがあつて町奉行から調べに来たこともあるから、奉行所へ届けようか、又は親戚、友人の類があるなら一ト先づ夫れへ落付くがよからうと色々相談をしてゐると、彼の男が、自分分は江戸に一人の知己も親類もないに依てどうぞ役所へ送つてくれと言ふたから、人々が衣服を恵んでやり、夫から役人の詰所へ押送されたことがあつた。

(著者の想像では、此男は、愛宕神社の前で、無禮な姿をしたので、天狗が老僧に化けて、出て、罰として神隠しに逢はせたのであらうと思ふ)

例五 豊後の由布ヶ嶽仙人

大分縣別府の西方に由布ヶ嶽なる高山があつて、山の巖窟に、昔しから通稱を由布ヶ嶽の仙人と云はれて名の出た仙人があつた。この仙人は、足利時代の末期頃から人に知られた長壽者であるが、三年に一度づゝ山下の人里に姿を現はして、病人などに仙薬を與へ、または人の仙道を問ふものなどには、偶ま説法をすることもある。其の仙人が下山をするのは、人間の世の状態を視るのが本旨であると云てゐた。

嘉永元年に、山から別府の街へ出たときに、多くの人が夫を見たのであるが、實見者の語るどころでは、木の葉を綴り爲したものを着た八十歳ぐらゐな氣品の好い白髯白髮の老人姿であつたが、その白髮は五尺にも及ぶほどで、房々ふさふさと後ろに垂れて殆ど地を掃かんばかり、風なきに旗の如く流れて居り、その腰には白狐だか白兔だかの革で製した薬袋をさげ、手には鹿角を着けた等身の杖を携へ、如何にも超俗の風

手をして、町を一週し終りて飄々乎として空を踏み由布ヶ嶽の方へ昇り行つて其影を失つたとのことであるが、その後また三年目には塚原村へ現はれ、或る病める老人に仙薬を投與し、そのものゝ前世が、支那の崑崙山の天狗であつて、修行懈怠の罪で、人間身に墮落させられたことを説明して聽かせて今後の心得かたを誨をさへてやつたと云ふことであつた。

此仙人は明治になつてからは、人里に現はれないやうになつたが、それは尸解し去つたのか、他の深山へ場換へをしたのか、又は人界の濁にごが強くなつたので、厭ふて出ないのか、此三者の内一たる理由であらうが、多分は後者に存するものであると考へられる。

例六 東京の小林仙人

明治二十六年、七人連れの米國人が東洋見物に東京へ來たとき、その頭上野うへの佐竹ヶ

原に住居してゐる小林と云ふ仙術家のことを聞き、人を介して、自分等の止宿して居る麻布區谷町の某邸へ請待し、その仙術なるものを實行させた。

小林仙人（彼れの通稱）は通辯役の水野とか云つた醫師を通じ、米人に、自分の仙術は、決して貴君等の娛樂に供する爲めに爲ることではなく、日本には仙道と云ふて神祕な道法があつて、それを修めたものは、理化學を超越した大なる不思議の能力を發顯し得るものたるを示すが爲めであるから、諸君はその心で觀てくれるやうにこの挨拶を述べ、夫から裸になつて、庭前の井水で體を清め、禪一ツの身で屋根の上に登つたときには、米國人は、このものは狂人ではないかと思つたらしく、頗る嘲笑の色があつた。

かくて小林仙人は「今是から祈りを捧げて太陽から火を下だし、諸君の唾へて居る煙草に火を移つして見せます、火が下つた兆には、先づ一團の煙が諸君の面前に起るべきに付、その時は直ちに煙草を吸ひ玉へ」と告げ終つて、合掌して太陽に面し、

尊嚴にして威貌ある面色にて何やら默禱をつゞけること約十分間に及んだころ、輪を作つて集つてゐた庭前の七人の前に、俄然として一團の煙が起つたと見える刹那、煙は消へたが、七人の口にして居る卷莖に、各々火がついてその煙を吸ふことが出来た。この奇異な現象に、米國人は言葉も出でず、唯だ屋上から降り來る小林仙人の顔を畏ろしげに眺めて居るばかりであつた。

次に小林仙人は、屋根の傾斜面を轉ろび下る小石を中途にて停止をさせて見せませと豫告をして、先づ一人の米國人に、屋上へ石を投上げさせた。石は屋瓦の上を速度強く落ちて下るとき、仙人は「ヤッ」と氣合をかけたなら、石はヒタリと止つて了つた。次の米國人も又同じやうに石を投上げて轉落させると、夫をも懸聲諸共即時に靜止する。残りの米國人も一人々々悉く投げて見たが皆同一の現象であるから、感心をして了つた。

次に小林仙人は、此家の庭に、希望通りの獸を現はして見せるから、何なりとも課題

をするやうにと告げたから、野狐を出して見せよと言つた。仍で仙人は一同を従へて座敷に上り、背後に西洋人を坐せしめて、少時合掌祈念を凝らした末、前庭の松樹の根のあたりを指さしたから、人々はその方を見ると、三頭の白狐が何所から来たものか現はれ出で、靜かに歩みを運んで居たが、暫くして樹間から姿を隠して了つた。

此日、奇なる諸現象を見せられた米國人は、小林仙人には何程かの金を報酬に出さうとしたら、仙人が、自分は藝人などではないから報酬は一切無用だとして請取らずに歸り去つたので、何事も報酬主義な米國人は、日本人は奇妙な性質であると云つて驚いてゐたと云ふことであつた。

右の米國人は、その後東京から北海道へ漫遊することになつて、懇切に乞ふて小林仙人の同道を求めたが、その目的は、仙人の奇術を見つゝ旅行をしようとするのであつた。同仙人は遂に承諾をして一緒に旅行をしたのであるが、途々種々奇現象を見

せた中に、或る日、愈よ最後の同伴日と云ふときに、米國人は紀念として日本仙術の最大なる秘現象を示してくれるやうに頼んだから、仙人は承知をしたが、やがて或る場所へ差かゝると六七十間の廣さの大きな谿谷あるところがあつたので、迂回すると手間がかゝるによつて此谷を向ふへ飛ばうではないかと言ひ出した。スルと米國人が如何に仙術家でも夫は出来まいと云ふ疑ひが顔に現はれたので、小林仙人は、先づ自分から飛んで御目にかけてと言ひさま、身を躍らしたと見ると、すぐ見えなくなつたが（砲丸の飛ぶ如き速度であるから）仙人は一ト飛びに前面の丘陵の頂きに飛び行き、オーイ／＼と手招きをして一行を驚愕せしめ、夫から又元の所へ飛戻り、今度は一人の米國人の背を『ヤツ』との喝聲と共に手で打つと、その米國人は仙人と共に右の谿谷を矢よりも早く、殆んど目にも見えない速度で飛躍して、對ひの丘陵の頂へ行つて居た。この奇怪極まる事を見せられてからは、米國人は恐ろしくなつたらしく、小林仙人に懇篤に禮をのべて勿々に別れ去つたことがある。

（小林仙人の消息は明治卅年頃から頼に絶へて了ひ、其生死のほどさへ分明ではない、仙人と懸意であつた下谷區御徒士町の氣靈教會でも曾て仙人の行術を心にかけて居るけれど一切わからなかつた云ふ）

音聲の貸し借り

山人界にも修行した有名な白石嘉津馬かづまの物語りに、曾て其師の杉山僧正が、手の離さぬ仕事をして居るとき、小用がしたくなつたら、其弟の古呂明と云ふのが、代つて小用をした云々とあるが、斯ることは凡人界の事では無いにせよ、天地間には奇妙な超理學的のことがあるものだ。左の二例は平田篤胤の仙境異聞に掲げられたもので、文化年代の事實らしい。

（A）大阪の住人で、非常な美聲の歌唄ひがあつた。或る日、外出をしたところ、見知らぬ僧鉢の人物に會つたが、その人が、そなたの聲を三十日許り借りたいが、貸してくれるかと言つた。可笑なことであるけれど別に心にも止めず、輕々しく貸しませうと答へた。然るに其男の音聲が翌日から突然潰れて仕舞つて少しも唄はれぬやうになつたので、何かの病であらうと思ひ、住吉神社へ祈念の爲め參詣に行く途中、前面より彼の異風な人が歩み來り、汝は甚だ頼み甲斐のない人間である。この間自分に聲を貸し乍ら僅か三十日間が待たれぬとて住吉社へ祈念に行かうとするのは憎い奴だ。汝そのことを神に祈るなら、自分は神のお咎めを蒙るに決つて居るから、我は汝を尋常では置かぬであらう。だうだ、約束通りに三十日間辛棒をして貸し玉へ。聲を返すときには、良き咒禁法まじなひを教へるであらうと言つた。

男は之を聽て初めて我が聲の出ない譯を知り、恐ろしくなつて、そのやうな譯とは知らないで神詣りをするところであることを告げて詫び、委細承知して引返して自分

の家に歸つたが、三十日の間、聲が潰れて居たに、三十一日目に彼の異人が來訪して、今日から聲を返すから請取るべし、また約束の咒禁法をも授けるであらうとて傳へたが、その日から直ぐに元の通りの美聲が出るので、唄ふには毫も差支が無かつたけれど、傳授の咒禁が、何の疾病にも靈効があるので、後にはその方を專業にして謳唄ひを止めて仕舞つた。

(B) 上總國東金町に宮差職の孫兵衛と云ふ人があつたが、或る日、見知らぬ人が來て、そなたの耳と口とを三年ばかり貸して呉れよ、後に御禮をするからと言つて頼んだ。

孫兵衛は不思議に思ひ乍ら、之も亦容易く承諾を與へたところ、其日から耳が聞こえなくなり、啞のやうになつて仕舞つたので、魔の障りだと人々からも氣の毒がられて、三年ばかりを暮らしたところ、或る日突然彼の異人が現はれて來て、二三十間ほどの距離から手招きをしたが、久しく痴人のやうになつてゐる孫兵衛のことであ

るから、直ぐに立つて出ようとはせず、グヅラ／＼して居ると、其所へ風の如くに飛んで來て、掌で背中を強く打つたので、孫兵衛は吃驚して正氣に立返つた心地になると、異人が、今日から汝に借りた耳と口とを返すから受取るがよいと告げると同時に耳がよく聴こへ、言語も鮮かに發するやうになつた。

そのとき異人が、禮を言ひ、そなたの生涯を安らかに送られるやうに護るであらうとて何所ともなく立去つた。諸人は、始からのことを知らぬので、孫兵衛は何か悪事があつて神の罰に會つてゐるのであらうと風評をしてゐたが、茲に至て孫兵衛から委細を話されて驚いた。さて孫兵衛の背には、彼の異人に打たれた大きな手の跡が、後年まで黒くなつて消へずにゐたのは不思議なことであつた。また孫兵衛は元來、技術が拙な男であつたから、異人が安樂に暮らさせるやうに護ると云ふたのは多分、差物が上手になるのであらうと想像をされてゐたところ、反對に益々下手に成り誰も用事を命じなくなつたので、成田不動堂の前へ移つて蕎麥屋を開店したと

ころ、非常に繁昌をして、生活がラクになつた。

文字書く手の貸し借り

徳川中葉のこと、江戸小日向の水野侯の祐筆某が、或る日門前にて一人の見知らぬ僧に逢ふたところ、その僧が、今度據所ない書會に出席せねばならぬので、貴君の手蹟を兩三日貸してくれまいかとて、懇ろな態で頼み入れた。

某は怪しい事と思つたが、とにかく貸さうと云ふて承諾したら僧は一禮をして立去つた。その日某は、主用で筆を執つて書かうとしたが奇妙にも一字も書けないので、大いに驚いて、何かの病氣のせいでは無いかとて主君に届出た。斯うして一兩

日間は筆が執れなかつたが、彼れは字の書けない真因に氣附かなかつた。

スルト三四日目に彼の僧が來訪して、謝禮を言ひ、字蹟を返すとて挨拶して一枚の書いたものを與へ、是は近火の護符である、近火のときに床の上に掛けて置くのだと告げて去つた。某は、爰に於て自己の字の書け無かつた理由を知り、彼の僧の凡人にあらぬを覺り、貰つた書を軸物に製して秘藏をして居た。また其日から字が元の如く立派に書けるやうになつた。さて近火のあつた度毎に彼の軸物を出して床に掛けると、いつも靈効があつたが、或る日、何と思つてか該軸物を土藏の中へ入れて了つたところ、間もなく又近火があつて、グズ／＼する内に居室は全部焼け、ただ古藏ばかりが怪しく焼残つた。

（本文の如き怪僧は昔しから天狗に限つてゐる。現今でも京都の鞍馬社の丁神は僧形の天狗であることは、同社の講社連中が、皆知つて居るさうである）

芝山仁王の怪事

安永年間のこと、昔しから靈驗所として著名な上總國山武郡の芝山仁王境内の松を、村の貧乏人が盜伐して薪たきぎにしようとて、或る日獨りて其松を根元から鋸引して押倒さうとするけれど、何故か動かぬ。連しきりに押こかさうとして力を盡し、疲勞を感じるやうになつたとき、體を休めてフト仰ぎ見ると、一丈餘もあらうと思はれた巨躰の人が両手で松を慥しつかりと押へて居たので、吃驚しさまに倒れて氣絶をして仕舞つた。翌日に至り村民に發見されて、介抱せられ、漸く息を吹き返して正氣づき、右の事實を語つたさうだ。不思議は之れに止らず、右の松はその後、新たに根附いて無事で生きて居る。けれどもその後毎年、伐られた其日になると、葉が悉く枯れ色に萎しぼれ、その後また青々とした葉に返るのである。文政五年の夏、此仁王殿てんへ參詣

に來た江戸の人もこの松を見たさうなが、昔し伐られたと思はれる根際に今も痕が残つて居つたと云ふ。

次に文政二年のこと、境内に新規に塔を建てることになつたが、その場所に、二タ抱へもある松の木が一株斜めに生へてゐて建築の邪魔になるので、寺の別當や信徒總代が評議して、此松を伐ることに一決をした。スルと其夜に松が後ろ向きに捻ぢ返へり、塔を建てるに妨げのない様になつたので、村民が恐懼し、伐採することを止めてその跡へ塔を建てることになつた。

また右の塔を建てるときに、老若の男女が大勢山から伐り出した大材を地車にて引出すのであつたが、一人の老婆が誤つて車輪の下もとに倒れた。人々は大に驚いて直ちに夫を救ひかけたが、大勢の力で引く車であるから、なか／＼一喝の聲に止るべきものでは無いから、此老婆はあわや車輪の下に挫ぎ殺されると皆々膽を冷やさせられた。然るに不思議千萬にも、何百貫あるかわからぬ巨材を載せた車が、老婆の腹の

上をスラ／＼と通りて何の怪我をも與へなかつた。このことがあつてから、里人の尊敬が愈よ加はつたと云ふ。

浅間山麓の怪夫

信州浅間山の西北麓、上州境附近の谷の少し高みに深林があつて、昔から魔所まところと稱せられ、土着人も畏れ憚つて滅多に寄り附かない所があつた。そこらには人の住む筈もないのに、時としては立派な宮殿のやうなものが霞に映つて見へ、或は鶏鳴又は微かに琴笛類の音も聞こへ、また偶まには、背丈の高い、漆黒の髪を垂れた帯刀の武人姿の異人を見懸けることもあると云ふ噂があつた。

約百二三十年前の天明年間のこと、山の南の輕井澤に山犬權十と綽名された剛強の獵師があつて、或る日息子と二人で右の魔所附近へ行き、小屋を建て、鞆網を張つて居ると、そこへ長髪の威嚴ある武人姿の男子が出て、小屋の前を通りかけたが立返つて權十を呼出し、此草鞋の紐を結んで呉れよとて左の足を差出した。

權十はその權幕に氣を吞まれ、畏れ入つて内俯しになり、解けかけて居る草鞋の紐を結んでやつたが、彼の人間は、片手を權十の頭へ當て、居たところ、その痛み堪へがたくあつたけれど、忍んで結び終り、右の足は如何と言つたら、右足は宜しいとて立去つた。

然るに權十の頭は異人の指の痕かたが三本深く凹んでしまつて生涯直らず、山犬を手捕りにした程の男も、その後は恐れて彼の魔所の附近へは鳥捕りに行かなかつた。權十の荒膽を挫いた異人は、天狗か又は武士上りの仙人の類であると想像される。

附
錄

天狗考

解説

一

過去一千年の永き間、我國民をして怪物の親玉とも思はしめたものは、天狗であるが西洋學の勃興に連れて、今日では誰人も天狗の存在を否認せぬ者は無い。併し古人が如何に科學の智識無く、また迷信に富めりとは云へ、天狗の實在を信ずるとは實に深くあつた。それは信せざるを得ないだけに、天狗に關する話材が各地にあつたからである。然るに明治以來、都鄙ともに俄然天狗の消息が劇減し、地方によりては全く跡を斷ちたところもあるので、現代人は天狗を全然古人の迷信産物として一蹴するに至つた。

明治の學殖者の或るものは、我國の天狗が、支那で云ふ天狐（天空に住む靈狐）または天狗（怪星的）とは別物たることを知つてからは、人種學又は言語學、或は歴史などから推考して、我國の天狗を以て、昔し支那の西北方から滿洲にかけて分布されたトングース人の轉訛して産み出された傳說的妖魔であると唱えた。トングース人の特徴は、眼光鋭く、鼻高く、脚も長い、乃ち我天狗の狀貌がこの型を具へて居る。現に我國にて天狗なるものを發現したのは奈良朝の初期で、丁度トングースが滿洲邊へ南下し、唐及び高麗の國人を通じてその存在が知られたのと前後して居る云々。

甚だ尤らしい説であるも、是は幽冥界の實在及びその理法等に全然無知な人の研究説であつて、天狗の實質を土臺にして批評せば、全くの素人説たるべきものである。尤も足利時代より繪師が描き出した天狗の狀貌には、幾何か亞細亞高原人種の面貌の特徴を寫した形跡もあるとも言へるも、之も確かなことでは無い。もし強ひて、

天狗の狀貌なるものが、外國から來たものとするならば、或る者の説の如く南支那の怪物「顛衢」から轉來したものと云ふことが一番無難である。但し我國にて天狗なる文字が初めて使用された日本書紀の執筆者は時代が舊くて南支那の顛衢を書いた百鬼大辨録を讀んで居ないから、夫から音便を採つたとは言へない。天狗なる文字は、支那には前漢の初期に現はれ、史記にもあるから、奈良朝の文士は史記に據ても夙に之を知つてゐる筈である。

けれども我國の天狗の狀貌が、傳説の顛衢と似て居ることは事實であるから、天狗の最初の繪師たる土佐家は材料を彼れに獲たかも知れない。『百鬼大辨録』に曰く、閩越之間、有怪魅爲障、一在當于此怪物者、忽顛衢其怪物之形、偶有髻髯見者、白長高髮打亂、衣絡羅衣、兩腋有長羽翼、鼻長忽化去于雲中。

支那では漢代から南北朝ごろまで、天狗を、火光ある炎々たる流星で、地上に墜ちて狗の如き獸になると云つた思想が、中古に及んで異動を生じて來たところもあつ

た。博聞録に、陰山有獸焉、其形如狸而白首、噉蛇、名之天狗云々。しかし支那人は天狗を獸に見倣して居ることは初めから動かぬ。日本紀にも天狗をアマツクツネ(天狐)と訓よまして狗いぬとは訓よましていないが、いづれにしても奈良朝時代から平安朝にかけて、天狗は、佛魔的動物であつたのだ、而して主に鷲やクソ鶯がその役者であつた。後世の繪の天狗の面貌に鳥であるのがある由來も此にある。要するに、天狗の本來の狀貌は繪師の畫いたやうなものでは無いのだ。

平田篤胤は天狗研究家の白眉であつても、初めは林羅山の説と同じく、天狗を魔界の生物だと云ひ、中頃から僧侶や、高慢なる儒學者の死後になるのであると云ふやうになつて居たが、後に彼が、有名な白石平馬と云ふ少年にして、天狗界に誘拐されたものを自家藥籠中のものとするに至り、天狗の解説に一段の進歩を加へた。

二

平馬を得てからの平田は、天狗は人間の佛教徒の或るものや、神佛混淆の山伏と云ふ

修驗道者や、或る種の鳥獸から成ると云ふやうに説き初めたが、この説は比較的正しい。

平馬の實地の説に據ると、天狗界では天狗とは言はないで山人さんじんと言ふのださうだが、山人とは支那で云ふ仙人と似た意味である。支那の仙人は、悠長な自適生活者で、天下國家のことには關しないが、日本の山人は、その神通力の點は仙人の如くであるけれど、神道を信奉し、神に仕へて國家を護り生民の幸福を圖はかるのが主なる任務である。而して山人には階級があつて、下等のものほど、品性や行動が下劣である。世に言ふ天狗なるものは、即ち、山人の第三流四流以下の劣等階級者で、人を翫あそんだり壓迫の害を加へたりする魔生物ましやうぶつであると云ふのだ。

(現今の某神道學者は、天狗には雲霧の精や木の精や深山の精やも成ると言つてゐるが、此説は首肯し難い)

とにかく天狗は實在物であるが、實在物と云つても顯界(此世界)のものではなく本

來は冥界の生物であつて、時には顯界を懸持で活動をする、稀には顯界で肉體生活を爲しつゝ、冥界へ往來するものもある。その人界に顯現するときには、恰も肉體的生物たるかの如き感觸を人に與へる。是は全く不思議な理法||宇宙の理法から生ずる事實である。

(近年西洋の科學者にも認められた冥界の物理は顯界の物理と相違をしてゐることが多い、その詳細は専門の靈魂學の書に於て爲すべく、茲には説述をしないが、冥界とても宇宙の内である。眞の宇宙的物理は人間界に於て理解すべからず、又之を學ぶべからざる性質のものであるのだ)

三

天狗が人眼に觸れるときの形態は、その時、その場合で、さまざまの相違があるが、要するに、人間から成つた天狗の本來の冥體は、人間的の體相をして居り、鳥獸から成つた天狗は、それ／＼階級次第の體相で、概要は半人半動物たるが原則である。而して何れも顯界または冥界の物質に成るところの夫々相應した衣服を着て居る。

幽界本場の天狗が顯界へ出て來たときには、人眼に映じないで、風影の捕捉し難いものゝやうであつても、能く人畜や器物を提げて空中を飛行する。斯くの如きことは現代人の智識には決して受入れない大怪事であるけれど、事實だから致方が無い。また人眼に形態を曝露せしめることも容易であるが、その場合には、自己本來の冥體を現はしたり、又は普通人に化け、或は鳥獸、神佛、妖魅の類にも自在に變装をする。また天狗と云ふと翅があるやうに繪に描かれてあるが、是は俗繪師の理想畫で、天狗の飛行自在を象徴したものであると察せられるのだ、但し下級の天狗又は准天狗の類には冥體的羽翼があつて、人眼に映じた事實もあるが、天狗は空行をするのに、毫も其翅を要しない。翼は全く彼等の素性又は階級を彰はす一個の標識物である。

天狗が人に見へたり見られなかつたりするのは、天狗の意思に生ずる機能的な力の現はれだけけれど、人によつては、人に見へまいとする天狗の機能を冒してその體を見

得ることがある。また天狗が空行をするときに、人を脊負ひ又は器具を携帯して居る場合に、一切の形象を人の眼から消したり、又天狗自身だけ人の眼に見へないと云ふ場合もあるが、是は天狗の冥的機能の不完全に原因することゝ推知される。

四

我國にて、天狗の素情に關する記述の最も確かなものは、騰雲と云ふ天狗に就て問答をした人の筆記であるから左に摘記をするが、この騰雲と云ふ天狗は、徳川家齊時代の大名土岐山城守の家臣、神城四郎兵衛のなつたのである。四郎兵衛は、文化五年に江戸の下谷長者町邸にあつたとき、或る日の黄昏、超海と云ふ天狗に誘はれて空走して京都を見物させられたことのある人間であつたが、其後一年ばかりを経て又誘はれ、遂に天狗界に止り、修行を積んで天狗となり、人界へは交通の出来ない身となつたけれど、生前に入魂じふこんにしてゐた江戸の某方へ折りくゞやつて来て、天狗界のことを話したので、その事柄が問答書にして書き止められたのである。

その體相 天狗の容貌は、少しも人間と異つて居らぬ（下級なる狗類又は木葉天狗の類は、さまでである）穀食をせぬ故に顔面には肉無く枯瘦の觀があるが、眼鋭く鼻筋通り、身長は高く、髪は延んだまゝに苳ることなく、毛は赤黒く、不斷に飛行するので、先端が自然に摺り切れて、その長さは肩を過ぎるだけである。眼の色は、眼球の縁が黒く、中が黄で、瞳は黒くして甚だ恐ろしく光つてゐる。

その食物 日常の食物は、松の葉、竹の葉、その他の木の葉を主とし、稀れには肉食をするが、肉食は、山中の魚、又は猿の子などで、魚は生肉で食ひ、猿の子は焼いて食ふ。深山に天狗火と云ふことがあるが、それは猿の子などを焼く火である。また天狗の内には、水計り飲んで居て、他の物は一切口にしない勇猛な精進者があゝる。すべての天狗が五穀を喰はぬのは、穀物は人間の力耕物であるから之を冒さぬと云ふ義心に原づくのである。

その衣服 衣服は、深山にある綿のやうなものを採つて織つたのを着たり、又は蒲で

織つたものを用ゐ、又は木の葉を綴つたものを着たりしてゐる。

その日常 穀食をしないから肉が無く、肉がないので寒冷炎暑ともに無感覺である。

また天狗は穀氣に遠ざかつて居るので、絶食をしてゐても人間の如く空腹に苦しむことが無い。又天狗は人間と反對に、夜を晝に代へてゐるから、夜間にも物を見得るのだ。夜間にも非常に高空へ昇ると甚だ明るい云つてゐた。また天狗には性慾が失はれてゐるので男根などは、幼兒のもの、如くで、その用は排尿の具になるばかりだ。

その性行 一般に天狗は甚だ恐るべきものとして人間に誤解されてゐるが、至つて正直で、人間を敵としないので、却て人間を尊敬してゐる、人間は萬物の靈長で、神の子孫であるからである。但し稀には人間に悪戯をやるものもある。

その階級 天狗には、社會組織があつて、金毘羅の崇徳天皇の靈を最尊者として居りすべて適材を適所に配合し、神明に奉仕するものは、邦家を護ることの用務に使は

れてゐて甚だ多忙である。天狗界には特別の文字もあつて書籍もある。天狗には、人界の大臣に相當するものが七人あり、その下に十六人、その下に又九人、次に五人あり、騰雲はこの五人の格に列してゐる。下級の天狗にして悪業のものは、罰せられて何時とはなしに形の消へて仕舞うものがある云々。

（著者は一寸茲に序でのこゝに書く、天狗に三熱の苦行なるものがある云ふ傳説は、佛家の口から出たことであつて、事實ではない。但し大成せざる天狗には、随分難行の修行云ふことがあつたけれど、夫だても、彼の銅汁を呑んだり火焔に焼かれるなどの大苦行ではない）

五

天狗の住所は、古人の信する如く、高山深山、又は海邊無人の岩窟、社寺の靈蹟地などであるが、元來日本の特産物であるけれど、支那、滿蒙、西比利亞の一部にも居た。現代に天狗の事實が絶無的になつたから、現代人が天狗を未開人の迷信産物だと斷言するに至つた譯であるが、何故に現代に天狗の事實が無くなつたかと云ふ

と、詰まり人文が開けて、彼等が之を遠遼の僻地へ避けたのである。

又何故に天狗が現代から避けるかと云ふと、顯界に於ける優生物たる人間が盛んになると、彼等の愛する大樹古木が減少した上に、人間のエネルギーが、天狗の冥體エネルギーを壓倒し勝ちであるからである。是は、顯界は、顯界生物の活動舞臺として造られた宇宙理法の自然な経過である。又モウーツの理由は世人が信じなくなると、人界に接觸して都合が悪いから、人界と遠ざかるのである。

事 例

例一 大木の巨枝を弾き返す

松江市の外中原町の西端に愛宕神社の丘陵があつて、松や椎などの大木が繁茂して居

るが、明治の初年ごろ迄は今日に幾倍する蒼鬱さで、鐘樓の邊は白晝でも日光を仰ぎ見ることが出来ない位に陰闇で、狐狸なんかは無數に居つて、種々の怪異があるので、男子でも白晝に獨りて山王社へ參詣の歸來ない人もあつた。而してこの山には、比叡山から天狗が祖傳すると云ふ傳説が昔から傳つてゐた。この愛宕山の男坂の左右に、摩天の巨松が今も數本残つて居るが、その一番南の上の大松で頗る奇怪な現象が數度起つたことがある。

風も雨もないかな晴穩の日に、その大松の第一の枝が、獨りてグン／＼地面近くへ垂れ下がるのである。この枝は地上から約七間計りの所に生じ、生へ際は四尺五寸廻りもあつて、枝の全長が五六間以上もあるから、此枝だけでも宛然一幹の大木であるが、夫が枝の附根から今にもボカツと折れるだらうと見られる迄に地面近くへ偃下した末に、俄然非常な勢ひでピトンと元へ弾き上る、實に凄い光景で、何千人力の仕事であるか判らぬが、是が續けさまに三度も四度も繰り返されるのだ。

愛宕山の東麓の北に、吉城氏なる松江藩士の家があつて、その主人は愛宕神の信仰家であつたから、此巨松の枝の弾ちけ返るのを見付けると、直ちに全家族を表坐敷の南の縁側へ列坐をさせて一緒に大松の方へ向つて合掌禮拜をし乍ら、その怪奇な光景を見るのであつたが、此事が二三回もあつたと云ふ。

是は今から約百年ばかり前のことで、筆者は、先年吉城氏の九十餘歳の老刀自と、その女である七十歳の谷子刀自と兩人から、父祖の直話としての右の話しを語り聽かされたのであるが、此二人の老婦人は、實直な老嫗で、ウソや誇張を言ふが如き人間では無いのであるから、事實の眞を傳へたのである。

また右の吉城家の主人が、愛宕山の境内の樹木の鳴る音を聞く日には、すぐに縁側へ驅出て山を見上げるのであるが、是も無風の靜穩な日であり乍ら、森の一部分の枝葉が大に動揺をするから、今日は天狗がおゐりになつたよ、誰か月經の悪るい者は居ないかとて、家の中を怒鳴り歩いて、女房や下女や年頃の女どもに問ふて廻はる

のであつた、もし家に一人でも月經中の女があれば、その者をして煮焚きを遠慮させる。またもしその者が焚いた飯や菜を食つた日であるなら、此日の愛宕詣りを遠慮したものであつたさうな。

(伯耆の大山と云ふ高山にも天狗の事蹟が種々あるが、大山寺の奥の院の横に大松が二本、谷を隔て、生へて居るのに、その兩方の松の頭を引寄せて二ツばかりより曲げてあるのは名高いことである、學者は空氣の作用で成つたのだと愚説を吐いてゐる)

□ □

天狗が大木の枝を撓めて見せた實例は、昔しから能く人口に膾炙してゐることで、この藝當は天狗の十八番だと想像されるが、現存人の實見談として最も新らしいのを一ツ掲げる。

明治八年、上野國利根郡東村の農、金子酉十郎と云ふ人が、村から五里餘りの下野國境にある庚申山の神祠に三人連れで參詣をした。此山は日光奥の中禪寺湖の背面に

ある巨山であつて、昔から天狗が居ると稱せられ、修験者の好んで登山する神山であるが、金子の登山は二人の某先達の登山するのに随伴をしたのであつたけれど、先達と同じ扮装をして一振りの太刀を佩いて行いたのであつた。

さて三人の一行は、頂上近いところの神祠に詣でてから、横の怪巖の大洞窟ある附近に行き、そこに繁茂してゐる大木の檜の下に跪坐し、各々両手に太刀を捧げて天狗に祈願の祝詞を上げた。スルト天狗の姿は肉眼には視へなかつたけれど、檜の一本の大枝が、獨りで地面に向つて下垂してから元へ弾け上つた。是で天狗が感應した證據と思ひ、三人は大喜びで下山をしたのであつたが、その折りに携帯した太刀は、今にも病人などに對して靈驗を顯はすので金子方に秘藏されてある。此事實の實驗者である酉十郎翁は本年は九十二歳の高齡であるが、夫婦揃ふて達者である。

(以上の話は金子家の親戚である同地の武尊神社々掌高橋氏から最近に著者が直接に聴取したところで、正確な事實である、尙ほ高橋氏は武尊祠のある武尊山の天狗談を語つたが、その内の一を左に記載する。武尊山

は標高六千六百餘尺の高山にして、日本武尊を祀り、古來靈蹟地として關東に著名の山である)

餘り古い事ではなく、明治の初年である。武尊山麓の一村夫が或る日登山をしたが、聊か不信仰者であつたと見え、神祠に對して不遜の舉動があつた。スルトお山巡りをする内に、突然千疊敷もあるらしい巨大な掌が現はれて、此人間の頭上から被さつた。その怪掌の指の太さは一ト抱もある大木のやうであつたので驚いて巨指の間を借つて逃さうとしたが、巨指が之を妨げるので意を果さず、散々に苦惱をした上で、神明に對して詛言を言つたら、巨掌が消失して仕舞つた。このつらき目に遭つた男は今も故人であるが、名高い怪事として話が村民の口碑に残つてゐる。

例二 傘が上空に取り上げらる

前項の吉城家から北へ五六軒目に、その時代に樋口孫六と云ふ柔術家が居たが、或る雨の降る夜に僕を供にして外出をして、外中原の氏神なる阿羅和比神社の前へ來か

かると、何者か、傘の頭を掴んで上へ持上げやうとする。樋口は剛膽な士であるから、少しも周章す、歸りがけまでお預けをすと言つて、傘の柄を離すと、傘はそのまゝ中天に昇騰して仕舞うたのであるか、訪問先から歸るとき、右の場所へ來ると、傘が上空から獨りで下りて來て、樋口の手に戻つて來たことがあつた。最初傘を捉られるとき、樋口は愛宕の天狗が自分を試めすのだと氣附いたから、少しも慌てなかつたが、それには亦左の如き事實が絡つて居る。

愛宕山と曹洞宗の清光院の墓地とが、山續きになつて接續して居り、晝でも此墓地は物凄しい陰氣な感じの強いところで、殊に墓地へ上る長い磴道の中に地獄門と稱せられた古い小門があつて、夜分そこへ來て「松風」の謠ひを謳うと必ず妖怪が出ると云ふ傳説が昔しからあつた。剛膽な樋口は、或る夜試めしに一人で此地獄へ來て松風の謠をうたつて見ると、果して山の奥から底力のある鳴動が起つて、一個の大きい光り物が出て來た。妖怪を豫期してゐた樋口も、それを見て敵はぬ心が生じ、

山を下りて逃げ出したが、光り物が、どこまでも追窮して來る。遂に我門の内へ驅込み、鍵をかけて内土間へ入るとき、門外から大聲で「残念した」と呼んで一ト抱き程の石を投げつけた。その石は門の戸を突破つて玄關横の入口の大口に當つて止つた。

此石は後年同家の漬物桶の壓石になつて居たが、この夜樋口が怪物に抵抗しなかつたは何故か初めから怪物に壓倒されたやうな氣がしたので、武士の手前を棄て、驅逃げたのであるが、後日清光院の山の怪物は、愛宕の天狗であると知つたのださうな。夫からと云ふものは、樋口は心膽を練つて、爾來怪物には怖れない方針を取つたから、右の傘取りの一件は、天狗が樋口をためすのであると見做されたのである。樋口のごとは、その人の甥にあたる島田善尤と云ふ故人の老人から聞いたことで、是は我家のごとで事實であるとの證言が附いてゐた。

例三 鰐淵寺山の怪

明治四年ごろ、松江縣の最初の社寺係りの官吏として、山本淡藏外一名が、出雲國內の神社佛閣の御神體調らべに各地を巡回したとき、廻りくつて神門郡鰐淵村なる不老山鰐淵寺に行き、松本坊で一泊をしたことがあつた。

二人の官吏は日の暮方に、奥書院へ通ふされて和尚と共に酒盃を交はして居ると、俄然暴風雨となり、一山が鳴動ししたが、やがて非常な地響がして、上空から三尺足らずの巨石が、庭の真ん中に地響きをして落下した。そのとき山本等は仰天したが、和尚は静かには、笑乍ら低聲で『天狗々々』と言つて、人々に注意を與へた。

鰐淵寺の山には、古來から天狗が居つて、氣に喰はない人間が、山で一泊をすると必ず、山荒れが起ることのであつた。明治の初年に、松江藩士の綿貫某が此寺の縁日に參詣をして山で一泊をしたとき、その夜、大に山が荒れて、杉の太木が二

三本も倒れる騒ぎに、寺々の宿坊で、お客さんの中で、辨當に腥物なまくさを入れてゐる人は居ないかと大聲で觸れ歩いた。綿貫某は、そのとき自己の携へて來た食物に、魚のあることを氣付いたので、大に恐縮をして、寺へ告げたら、寺男が夫を受取つて、谷川の下流へ棄てたら、山荒れが間もなく静まつたことがあつた。

例四 種々な惡巫山戯

松江市の東北二里にある枕木山は、推古天皇時代の建立の華藏寺と云ふ古刹がある靈山で、山巔に昔は天狗が居たが、何か氣に喰はぬことごともあると、能くあくだけたもので、寺の小僧が、馬場にある高さ十四五間の大杉の巔邊へ掴み上げられて騒ぎになることなどが屢々あつたので、和尚が怒つて、天狗を封じて、隱岐國へ追ひ遣つたことがあると云ふ寺の口碑が残つて居る。但しこの事は何時の時代のことか判然しないが、茲に天狗の惡巫山戯をしたのを實見した者のある確かな話があ

る。

石見國安濃郡多根村大字野城の野城川の清流を俯瞰する急峻な丘陵に、天台宗の古刹の圓城寺と云ふがある。現今は衰微をして居るけれど、三四百年迄は、國內第一の大寺で、諸豪族の信仰が厚いので却々盛んであつた。而してその頃から、山に天狗が居るやうになつたのである。天狗の居るところは、奥の院で、そこは圓城寺山の一番高い所の樹木の密茂して居る場所であるが、昔しから住持が、毎日、自身で供物を此奥の院へ運びに行く慣例があつた。

文政年間のこと、その頃の住持は老僧であつて、坂を上り下りするのが難儀なからとて、天狗を山の中腹にある禮拜堂まで下りさして其所で供物を供へることにしたところ、天狗が機嫌を損じてあばれ出したのである。

寺男が庫裡の臺所で飯を焚いて居るとき、何時爲ることもなく灰が掴んで飯釜の中へ投込まれてあつたり、風呂を沸かすと、湯が抜いてあつたりする。また寺の飼犬が高

所からキャン／＼悲鳴を擧げるので、庭へ出て見ると、大木の枝に引ッ懸けてあつたりするから、住持も往生し、元の如く供物を奥の院まで運び行くことにしたら、天狗が穩かになつた。この事實は、當時の寺男であつたもの、甥の清水富五郎とて、圓城寺から二里ある大田村の人間の縁故者から聴取した事實である。又此山の天狗の腰掛石が、洪水の爲めに山から川へ落込んで、下流へ出で、それに腰をかけた人間に崇つた話は本篇に書いた通りである。犬を樹の梢に引ッ掛けたと云ふが、似よつた話しが他にもある、出雲國八束郡枕木山の古刈華藏寺の裏山にも昔し天狗が居つて、時々小僧を馬場の大杉の頂上に引ッ掛けて苦めるので、和尚がその惡戯天狗を封じて隱岐國の山へ押こめたと云ふ寺の口碑が残つてゐる。

例五 野州古峰ヶ原祠の怪

日光の東南山續きの古峰ヶ原の神祠は、古來行者輩の參籠修行の靈場で、現代にも天

狗に關する事實があつて有名である。

明治三十年ごろのこと、岩代國の上州境の檜枝岐村の屋根葺職の定助と云ふ信仰人が友達と二人で古峰ヶ原へ詣り、その夜二三時間お籠りをしてから寢室に入たころ、廣前の方で誰か角力か劍術かを始めたやうな音がするので、障子の穴からのぞいて見ると、丈の高い見慣れぬ人間が七八人も居て、定助の好きな角力をとつて居るので、大喜びで見居る。又連れの男も、その好きな擊劍が始まつてゐるので是も大喜びで、二人とも一時間近くも覗見をして楽しみ、勝負ごとが終つてから、兩人とも睡りに入つた。

翌朝二人が目を覺ましたときは、もう日が高く昇つて居て大ぶん朝寢をしたとがわかり、周章て起き上り、日光へと出發した。二人は此日早朝出發する豫定であつたところ、前夜、夜更かしをした爲めに寢過ごしをしたのであつた。斯くて二人は日光へ行く途中、昨夜は面白かつたとして話し合つて見ると、二人の見たものが相違して

ゐるので、各自分の見たところを眞實として争つたがよく考へて見ると、そんな筈は無い、これは屹度天狗が二人に馳走の目的で、その好きを物を演じて見せたのであらうと云ふことになつたが、夫にしても、何の爲めに二人が天狗の好意を受けるやうになつたのかと色々考へて見ても別に是と云ふことが無い。唯だ一ツ或はこの事の爲めかとも想はれることがあつた。

それは、昨日定助が奉納錢を献つるとき、財布の中へ手を突込んで、掴み出したまゝの額を捧進したので、その殊勝の點どもが賞美されたのかも知れぬとの一條である。さて二人は六里ばかりの山道を、天狗話に夢中になつて歩き、思つたよりも著しく早く日光に着いて驚いたのは、二人が古峰ヶ原を出たよりも約二時間近くも先きに出發して日光へ向つた一團のものよりも早く日光へ着いたことだ。而して更に不可思議なのは、その先發團と同じ道を行つた筈であるのに、途中で追抜いたことを双方知つたものが無かつたことだ。定助ら二人は、知らぬ間に或る道程を、或

は天狗に提げられて空行したのかも知れぬと驚いたさうだ。此定助は、ズット以前に居村近くの高山駒ヶ嶽の林中で、天狗を見たことがあつたと云ふ。そのとき二人連れで山中へ分け入るのに、何となく物凄くなつて來たので、連れの男は後へ返つた。定助は勇を鼓して一人で前進中、大樹の大枝を押分けてヌツト異態の男が現はれたが繪にかいてある天狗に似てゐたので、驚いて逃戻つた。この時の恐ろしかつた氣持は永く忘れられないと言つて居た。(上州高橋金作氏の話)

□

□

大正五年夏、知人のT氏が避暑旅行をして古峰ヶ原へ詣る途中、夫婦の樵夫と一緒になつたが、その樵夫の語るところでは古峰ヶ原の天狗は著名なもので、山の大本の立木が、風もないのに俄然と折れたり、又は捻ぢり倒されることがある。近いときのこと、穩かな日であつたに、杉の木が二本、兩方から幹を打合はせられてゴツン／＼と大きい音がするのに出逢つたさうな。

また古峰神社の參籠者は數百人一緒に食事をするのであるが、賄所から參籠者に一ツ／＼膳を据えるときに天狗が手傳ひすると云ふ事がある。臺所で膳を三ツ四ツ積み重ね、夫を修行の詰つた袴着の若い男が左右の手に、上端の膳を持って、エツと氣合ひをかけて腰をのして立上ると、多くの膳が、上部の膳について一緒に上つて、食堂へ無難に運ばれ行くのださうだが、この怪事は有名なことで少しも疑ふべきことではないと云ふた。

例六 箱根山林の怪

箱根山の帝室林野管理所に詰めて居た人が、土地の津田次郎吉なる人の直話として左の如きことを聴かしてくれた。

『今日こそ山の茂りが、うすくなつて居るけれど、明治前までの山林の蒼鬱とした繁茂さは非常なもので、大木の重り合つた場所などは、白晝にも提灯無しでは歩るけ

ない位で、山には天狗が居ると言はれて居つたが、明治初年から木を伐り初めた。その当初は、木を伐ると、どんな静穏な好天氣であつても、山が鳴動し、夫から、ミツ／＼ドシン、ビシ／＼と大木が倒れ、小枝がもげる音が物凄く聞える。是が誰人も居ない場所に起るのだ。又樹木の倒れたり折れたり、する音の外に、今頃の飛行機の唸るやうな怪音が上空を左右して、何物か怪物が飛交うやうであるから、その恐ろしさに杣も誰も這々の躰で山を飛出したものだが、人々が逃げると、山の荒れが自ら静まつて日は麗かに照つて居るのだ。

偶ま剛氣な人間があつて、天狗も山の神も居るものかさて、勇を鼓して行くと、忽ち又山鳴りがして大木が揺れ小枝が飛び、又例のブーン／＼と強く唸つて空中を縦横に飛交うやうな光景が生じ、果は大石がゴロ／＼足元へ轉ろげて來るので、その人も色を失つて逃出して來たものだ。夫でも又片ツ端から少しづつ伐木をやり、年月の過ぎるに隨て山は明るくなり、怪事もなくなり、天狗の住みさうな場所もなければ、

ば、清泉も湧かぬやうになり、結局今では町民も困つて居る。今から考へて見ると此箱根山は、昔のままの神祕の籠つた山であるのが良い位だ』

例七 學童の神隠し

神隠しと云ふのは、昔から天狗の所爲に限つたことである。大正五年七月二十二日、甲府市の東北端に接した相川村の相澤榮吉の長男富雄と云ふ、小學校の三年生が、午前中に太郎と云ふ一人の友達と、聯隊附近の山へ花摘みに行き、正午過ぎに、太郎は戻て來たけれど富雄は、何時までも戻て來ぬので、騒ぎになり、村民は山探がしをして居ると、同日午後六時頃に、長野縣西筑摩郡日義村の宮ノ越附近にて迷兒になつて居たのを取押へたと云ふ電報を發してくれた人があつたので、親の榮吉は直ぐに迎ひに行つた。

相川村から宮ノ越までは三十里計りあるのだから、汽車に乗つたら知らぬこと、さも

なければ、四五時間で行ける筈がない。此日のことを先きに歸つた太郎は次の如く言つてゐる。山へ行って遊んで居ると、一寸睡くなつた様な氣がしたが、シツカリ目を覺して見ると、富雄が見えないから、呼んで見たが返事が無いので、自分ばかり獨り歸つて來た云々。

又富雄を發見した日義村の元収入役をしてゐた某の語るを聞くと、午後五時過ぎに、宮ノ越附近の鐵道線路を、お父さん〜と泣き乍ら藪原の方へと走り行く子供があるので、呼止めて訊て見ると、甲府在の者だと言つた。穿いた麻裏の緒には、相川尋三と書いてあるから、ともかくも日義村の小學校へ連れて行て、學校の眺望臺に立たせ、何方から來たかと問ふと、山の方を指して「あの山から」と計り。學校はと問へば、師範學校附屬小學。校長の名はと問へば、濱幸次郎と答へて一點の淀みが無かつた。何分と彼は血眼になつて家を慕つて居り、問答が濟むや濟まない内に、家は此近くだから線路を傳つて行けば歸れるだらうと直に身を躍らせて又も驅

け出すと云ふ騒ぎ、お前の所は何十里の遠方だからとて、夫を引留めて、種々と問ふ間も、父さん母さんと泣き叫ぶのを見れば仲々ジゴマ式の摺れつからしな兒童とは受取られず。縦合貨車に乗つて此地方へ來るにせよ正午過ぎから五時過ぎには來られる譯で無し、固より一錢の持合せもなく、三十里驅けり歩るいたとしても、まだお腹も空かず、別に疲れた態も見えなかつた云々。

富雄が、家に歸てから、親に語るどころでは、自分も何となくブーツとして睡むいやうになつたが、誰か人が來て此方へ來いと言つて引ツ張つたか抱いたかされたやうに覺へたが、それから、どうしたかわからない。氣がついて見ると山の中で道に迷つて居るところだと思つて、里の方へ驅け出たのだと至て不得要領なことを語つたと云ふことである。太郎も睡つたのは不思議である、天狗が太郎を睡むらせて置いて何も見せないやうにして富雄を誘拐したのであらう。

例八 天狗惜みの松の木

丹波國北桑田郡宇津村大字下宇津の湯淺喜之助の所有の山に、古くから天狗の居ると云ふ大松があつて、村民間にその怪異に關する傳説が残つて居り、後には此松に不動明王が祭られた。然るに喜之助方には、何とは無しに變異らしい事や凶事が打續いたので、松の木のある山を手放す氣になり、明治廿四年の秋一旦、弟小三郎の名義に替へ、次いで小三郎は、彼の大松を同村の大工の向井市太郎なる者に賣渡した。市太郎は天狗などのことを信じない人間のこととて、良材が手に入つたとて大に勇み、或る日四人の手傳ひを連れて、天狗の松を伐りに行き、自身で真先きに斧を振上げる。忽ち空中より威嚴のある太い聲で『待てい』と言つたものがあるので、不思議に思つて、斧を下した。そのとき又『俺は此松を宿にして居るものだが、外に棲家を探がすから暫時待て』といふ聲がした。

この空中の聲は市太郎のみならず、四人の手傳者の耳にも入つたから、手傳者は色を失つた。けれど市太郎は案外平氣で、ナニ構うものか伐れ〜と言つて再び斧を振上げようとする。目がクラ〜としたと同時に、意外とも奇怪とも、その手にした斧も、そこらに置いてあつた他の斧、鉋、鋸の類が一個も残らず姿を消した。

市太郎は「ヘン、天狗の奴め悪戯をしきつたナ、記憶て居やがれ」と捨白を置いて人夫を連れて午飯喰ひに山から宅に歸り、午後になつた斧鉋類を提げて再び山へ行つて見ると、先刻奪はれた諸道具が残らず松の根際に行儀よく並べて、立すけてあるから市太郎は愈よ怒り、更に勇を鼓して斧を揮ひ無茶苦茶に伐り倒し、晩方に我家に歸つた。此の日午前中に、市太郎が松の木の下で眩暈をしたた時刻と同じころに、賣主の小三郎も、我が家に於て何の理由もないのに眩暈をして、一時卒倒をしたと云ふ。

さて市太郎は山から戻つて來て、風呂に浴るとて着衣を脱いで素ツ裸になるとき、俄

然發狂狀態となつて屋外へ走り出たから、隣家の人々が、夜中松明を點して山々を探索したが、翌日に至り、山中の小屋に臥て居たところを發見されて連れて歸られた。けれど彼れの狂態は癒ることなく後日に至り自殺をした。又後年小三郎も建物をするとき怪我をして死に、その百日目に娘の小須美も雪隠で頓死をした。

山の前の持主の喜之助の婿養子齋次郎は敬神家であつたので、天狗松の崇りを恐れ、明治四十二年に至り神に祈禱を爲し、祭祀の完全不完全を吾々夫婦の内の一人に夢にて靈告を示されたいと念じて臥床をすると、女房の小久は異様の夢を見た。その夢は、我家の納屋の棟に二人の女神が並んで立つて居る。二人の女神は珠玉を綴つた天冠を被づいて全身が金色に輝いて居り、また別に庫の棟にも二人の男神が並んで居たが、是は頭巾のやうなものを被つて居た。そこで小久は夢乍ら祖母のノブに、何神さまかと訊ねると、祖母が、男神は不動尊で、あの太松の所に居られ、往昔は人が澤山參詣をしたものだが、後世に絶へて仕舞つたと語るときに夢が覺めた。そ

こで齋次郎は、毎日天狗松の切跡へ神饌物を献じ敬神の態度を續けて居ると、その後には夫迄三十年間本家分家に引續いて絶へなかつた病人や變異が根絶をした。

その頃同村字栗生谷の三川某なる元氣漢の青年が毎日、山へ行つて材木を運搬する途中、彼の天狗松の切株の下を通るのであるが、神や佛が在るものかと廣言して或る日齋次郎方から供へてある餅や魚を取つて喰て、大自慢をして居たが、二十日ほど経て別に煩ひもせずにはコロリと頓死をした。(湯淺齋次郎氏の話直)

例九 岩松採り脅かさる

出雲國第一の奇勝地たる立久恵は、神龜峽の雅名を以て文人輩に激賞せられ、數十丈の奇巖が怪松を戴いて約七八町ばかりも溪流の一方に立列らんで居り、其巖山の間に一字の薬師堂があつて、昔しから天狗どころと稱せられてゐた。明治の初めごろ著者方の下僕の瀧藏と云ふが、一人でそこへ參詣に行つて下山をしたとき、數人の

參詣者に會つたところ、何故かその人々が、大層ビク／＼恐れた態で道を譲り乍らあなたは御参りなされたのかと問ふたので、然りと答へたが、諸人は連りに頭の先から足の端までジロ／＼と眺め廻はし振り返り／＼行つたので合點が行かなかつた處、後で仔細が判つた。

彼は天狗であらうかと疑はれたのであつた。彼は背の高い嚴めしい體の作りの男であつたのだ、其ころ立久恵に天狗が現はれた事實が評判をしてゐたので、參詣者はあつても一人でゆくものは無かつた。然るに彼は一人で巖山の中からノコ／＼出て來たから、尋常の人間では無かるまいと疑はれた譯であつた。また天狗が現はれたと云ふ話は下の如くである。或る大膽な男が、此の山の奇巖の腹に、美しい枝振の岩松が澤山生へてゐるのを採る爲めに、十數丈の繩にブラ下つて崖へ下りたところ、絶壁の中ほごから、突然異様な人間が出て來て、繩を焼かうか／＼と呼ばはりさま、火をつけたとも見へぬに、繩の下端に火がついてドロ／＼燃え出したので、そ

の者は懸命に繩を手繰つて上つて逃げ歸つたことがあつた。この事が評判になつて居たのを瀧藏は知らずに一人で參詣をした爲めに、天狗かと怪まれたのであつた。右の立久恵から北方二里ばかりに旅伏山と云ふ山があつて、夫にも天狗が居るとのこと昔しから言つたものだが、明治中年のこと、土地の人間で大阪へ出てゐる某青年が徴兵を免れたいとて、山の天狗に祈願をかけたところ、或る夜の夢に、天狗がそちは甲種の躰格を有つて居るけれど、免がしてやると告げた。而してその青年は壯丁検査に方り、不思議に不合格者とされて徴兵を免れた。この評判によつて、該旅伏山へは、徴兵免れの心願を以て參詣する青年が今に少くないと云ふことであるが、旅伏山の山上には氏神の祠があつて、平素は無人で、祭禮のときばかりに神職が詰るけれど、祭禮日でない時分に、時折り何人かゞ在つて固く閉てある神殿内に人の居るやうな氣榮へがするのは天狗であらうなご、今頃でも云はれてゐる。

（最近著者は同地の老人に遇ひ得て聴取したところによる、岩松採りが綱に下がつて岩壁の中

央部まで来るこ、姿は見へぬが何者か上方から、綱を截らうか〜と言つて綱を描ぶるので、喫驚して、唯今すぐに上ります〜と叫び、懸命に綱を手繰つて巖の頂へ逃げ登つたと云ふ。この傳説が眞實か、綱が下端から燃え出したと云ふ本文の記事が眞なるかは不明である。

また本項とは關係の無い話であるが、丁度その事であつた當時立久惠から北二里ばかりの川跡村せき稲岡の農屋號せき徳名と云ふの主人が天狗に渡はれて伯耆國へ運ばれたと云ふ怪事があるから記載する。(尤も、この天狗は立久惠の天狗か、川跡村から北方一里ばかりの所にある旅伏山の天狗か夫は不明である。旅伏山の天狗の靈驗談は、明治二十年頃にも一つある、大阪に出稼ぎ中の村の或る壯丁が徴兵逃れを祈つたところ、天狗が籤に當らぬやうにしてやるこの夢を見せて其如くになつた、この噂が高くなり、今も適齡者が密々に同山へ徴兵逃れの祈禱に登山するものがある。)

或る日雨上りの折り、徳名の親爺が、腰篋をつけて田へ出て仕事をしてゐると、夢現の如く前に一人の僧形の人間が現はれて、何所かへ行かうと言つた様に覺えたが、それから後のことは何にも意識しなくなつた。暫くして正氣づいて見ると、自分は見知らぬ土地の海濱に立つて居るので、茫然としてあきれて居た。此所は伯耆國夜見濱で、出雲の川跡村から二十里もある所である、其内に濱の人々が寄つて来て何所

の者かと訊ねるので、住所と姓名を告げ、自分はどうして此所へ来たのかサツパリ解らぬと言つてウロ〜として居た。元來この人間は非常に正直なウスノロであるから、濱の人が神經病者と見てとり、村送りにして稲岡へ歸らせた。

あとで調べられた結果、徳名の親爺が田の中から消えた時と、夜見の濱で發見された時とは唯だ一時間ばかりの差があるらしく、とても人力で歩いたもので無いことは明かであるので、天狗が提げて行つたものと想像されたが、是は左様見るべきものである。

例十一 天狗の護る劍術家

徳川の末期に、伯耆國の名山大神山の西麓なる八郷村の舊家竹内の獨息子やがうの藤一郎と云ふ五歳の幼童が、或る日乳母に連れられて野へ遊びに出てゐたところ、乳母がチヨイと傍視をした隙に、姿が空に搔消す如く見失はれて了つた。全村の搔動となり

神隠くしに逢つたものに違ひは無いとて、両親は悲歎に暮れ、無事歸還のことを各所の神佛に祈願をこめて毎日待てゐたけれど、何年経ても杳として消息が知れぬのでモウ此の世のものでは無いと諦らめ、失踪日を命日としてその後世が弔はれるやうになつた。

然るに藤一郎は十四歳の齡としにヒョコリと出現して戻つて來たが、如何なる所に何をしておゐたと云ふことは全然口外しないから、誰も知ることは出来なかつたけれど、天狗に浚はれて天狗界に成長したことだけは、容易に想像されてゐた。と云ふのは、非常に劍術が達者であるのと、一室に天狗を祀つて居ることゝで知られる。天狗の室まと云ふのは、平素閉め切つてあつて藤一郎の外は誰人も入ることを嚴禁した神祕の室で、一年にたゞ一回、天狗が山へ歸る日があつて、その折りに家族が掃除をしに入ることを得るのみである。またこの天狗の室の床こゝの懸花かけはな活には一本の藤の花が活けてあるのであつたが、不思議なことには、此藤は一年中花が咲いてゐて枯れな

い。これに就ては下のやうな言ひ傳へがある、花が凋まぬ限りは、天狗が此の室に居つて一家を護るのだと知れど云ふことであつた。

尙ほ藤一郎方には不思議なことがさまざま現はれた。家族や奉公人などの出入りする家の戸口と云ふものが、一尺餘りの圓形の窓のやうにした壁穴であるが、下男が山から薪を脊負つて戻るとき、その負荷のまゝで此の狭い入口から内へ潜り入るのであつた。どうしても此の理が人には解らなかつた。また他國から道場破りを志して來た武術家があると、先づその日は一泊をさせるのであるが、その者が翌日目を覺まして見ると、自分の體は床の下の身動きもならぬほどの狭ぐるしい牢獄同様な構造の一室に臥て居るので、呆氣に取られ、大聲で助けを呼んだ後に漸く扶け出されねばならぬ。大抵な人間がこれで荒膽を挫がれて了つて、這々の態さまで逃げ出すのがおきまりである。

偶ま我慢魂のものがあつて、是非藤一郎と立合ひたいと云ふものがあると、藤一郎は

之を道場へ招き入れ、先づ竹刀を上へ投げ上げ、エイの氣合とともに右の手でうけ取り、夫を足下に踏んで、あひて對手の武者修行にこの竹刀を引抜いて取つて見よと云ふから、對手は手をかけ金剛力で其の竹刀を引取らうとするけれど、藤一郎の力足が貧乏揺るぎもしないので、竹刀が取れぬ。そのとき藤一郎は此の竹刀が取られないやうでは、とても自分との立合は出来ぬ、このまゝ歸り玉へと言つて追ッ拂ふのが例であつた。藤一郎と他流仕合ひに来て、仕合つた武術者は恐らく一人もあるまいとの事である。

又マサと云ふ下女があつて、日々藤一郎が門弟を指導するところをのぞき見をするのであつたが、いつしか劍道のコツが少しばかりわかるやうになつたらしく、折り／＼門弟たちに冷評を言ふから、門弟どもが小面を憎み、マサが水汲みに行くとき、後から忍んでゆき、竹刀でマサの肩先を不意に打下ろすと、マサは巧みに身をかはしさま、水桶について居る鎖でチャリンと受止める。どんなに忍びやかに後から行つ

て打込んでも一度も打たせたことが無かつたので、此の下女は脊に眼があると言はれたものだが、是は下女自身武術ではなく、藤一郎方の天狗の冥護によつて斯かることが出来るのでは無いかと疑はれたと云ふ。

藤一郎の劍道は實に精妙なものであるが特に据切りが得手であつた。或る日藤一郎は下女が井鉢の水に向つてしきりに、手を縦に振つて居るところを見附けたので、わりや何をするのだと聲を懸けた。スルと下女は、旦那のなさることを真似してゐると答へた。藤一郎は毎朝下女が運んで来る手水盥の水に向つて、手のひらで研る型をやつて腕を練るのが習慣で、發矢と空を研ると水が左右に分れるのであつた。そこで下女に、わりや水が研れるかへと擲掄つて問ふと、下女の答は意外！、旦那さんのやうに二三日來研れるやうになりましたと言つた。

では俺が前でやつて見せよと求めたので、下女はあらためて演ると、如何にも容器内の水が左右に分れる。藤一郎は驚いて、こんどは庭へ連れて出て、或る庭木の小枝

に對つて水を斫るのと同じ型をやらして見ると、その小枝が刃物でバツサリと斫つたやうに落ちたから藤一郎は愈よ驚き、汝の手は恐ろしい手になつて居る、自今決して物を斫るやうな眞似をしてはならぬことを固く誠める、而して我家は今日限りで暇を出すと言ひ渡して之を出して了つたと云ふ。藤一郎の居村は藤一郎の感化を受け、明治初年ごろまでは、村内の家毎に殆んど擊劍道具を有たぬは無かつた位に劍道流行の村であつた。

例十一 生駒山へ來た天狗

大和郡山町の長島金三郎と云ふ人が、紀伊田邊の南方熊楠氏に話した自身の經驗談である。明治七年この人が十四歳のとき生駒山の寺に預けられて居たが、同寺では例年四月一日に大法會があつて護摩を修し、各地からの參詣の士女が群集するのである。又このころ大和吉野郡天川村大字洞川の寺から、前鬼和尚と云ふて五十餘歳で

眼深く仙人顔の僧が毎夜のやうに高下駄穿きで茶話に來訪し十時過ぎになると立去るのが例であつたが、この和尚或る日、生駒寺の小僧らから、四月一日の法會に天狗を連れて來て見せよと強ゐられて、承諾をしたが夫は自分が生駒寺へ預けられた前の年のことである。

扱てその日になつて和尚が來ると同時に、寺の裏の大松の枝に七八歳ばかりの子供の姿をしたものが數人居つて遊んで居る、和尚は之を指示して天狗の子僧だと説明をしたら、子供の天狗は面白くない、大人の天狗を連れて來て見せよと言はれ、夫は困難の事情があるのだが、マア試^{ため}して見ようと約束をして立歸つた。而してその翌年即ち自分が寺へ來た年の法會日に前鬼和尚が一人で來たので、吾らは貴僧は前年の約束の大人の天狗は連れて來ないかと詰ると、約束通り連れて來て居る。護摩壇のところを見よと答へる。そこで護摩壇を見たが、天狗が見へないので、居らぬと言ふと、成ほど凡人の眼には見へない筈だとして、和尚は自分の佛衣^{ころも}の袖を透かして見させた。

吾々は其所から見ると、如何にも護摩壇の邊に天狗が充滿するほど多數來て居るから驚いたが、頭は坊主で、女性らしく見られたのもあり、着衣は尋常の僧同様のが多^くあつた云々。天狗が本來隱形の冥界物たるはこれでも明かである。

例十一 天狗の防火隊

三河の豊川稻荷山の天狗と、遠州秋葉山の半僧坊の天狗とは、昔から勢力争ひをして居たものだが、明治維新に神佛混淆の弊が革められて、古來「大權現」などの佛式稱號持ちの神祠は殘らず布達を以て稱號撤廢を申渡された。半僧坊もそのとき大權現を褫奪されたのであつたが、間もなく或る夜、境内の大杉が一本、根から拔上げて刎返された。是は豊川稻荷社の天狗の所爲であつたと知れた。

半僧坊の天狗は口惜しがつたが、「大權現」の神號を奪はれて神通力を發揮することが出来ず、(面白いのは幽理だ)豊川稻荷社へ何の返報が出来ないとして毎度住職へ夢で告

げて悲しんだ。そこで半僧坊も憤起して、總代を連れて東京の教部省へ出頭し、係官の吉村氏(後年、神習教を創立した人)に面會し、事情を告げて、元の通り、大權現の稱號を允許されたいと懇望をした。半僧坊は決死の覺悟で上京して居るからナカ／＼頑固に泣附いた。

吉村氏は大に同情を表し、そのことは教部省ではどうもすることも出来ないが、唯だ勅命さへ得るなら叶ふことであるから、是は天子御親任のある山岡鐵州氏に絶^ぶり込むがよからうとて入智慧をしてやつたら、半僧坊の住持は早速山岡邸を訪ねて願意を打あけた。鐵州居士はその意を諒とし、折りを見かけて聖上に申上げると、御許しになつたので、半僧坊の拜殿の扉の上には、直ちに元の通り、大權現の金文字入りの額が掲げられた。スルと、神威即時に蘇生し、天狗がすぐに豊川社へ駆けつけて境内の一本の大杉を刎返し、これ見ると威張り返つて復讐をした。

その事があつて間も無い時のこと、或る日の日中に、東京四谷荒木町に大火事があつ

た。其とき宮中に出仕をしてゐた鐵州居士に、聖上から、汝の居宅の方角が焼ける、急ぎ歸れとの御詔が下つたので、居士は急で歸て見ると、猛火は既に隣家に迫つて居り、居士方の屋上には防火者が一パイに居るので、人の重みでよくも家が潰れぬ事と思ひ乍ら、家の中へ飛込み、早く酒を出せと家人に怒鳴り散らした。家人は誰に酒を出すのかわからぬので、問ひ返へしたら、屋上に居る人に出すのだと説明をした。

家人は不審な面をして、火を防ぎに来た人も、追々逃げて先刻から一人も残つたものは無い筈だと言つたので、居士は怪しく思ひ直ぐに庭へ出てみると、タツタ今屋上に充満するほどに居つた人が一人も居ないので、是は妙だと思つた。スルトやがて風が吹返へしになつて、火が彼方へ靡き出し、その爲めに居士方は類焼を免れたが、居士方の周囲の人家は一戸も残らず焼失してゐたので、當時世間では不思議がり、聖上御信任の人は斯うした事もあるものかなどと評判した。

其後居士は、吉井氏に會つたとき、自分の見た屋上の消火人間の怪事を話すと、吉井氏が、夫は半僧坊の神使が天狗をつれて來て防いだので、その人間と見へたのは實は天狗であらうと言つたら、居士がその譯を訊くので、大権現免許の一件によることを説いたところ、居士は大に感歎をしたことがあつた。

（吉井氏から聽いた九鬼復堂氏談）

古人の記述から

▽叡山の怪象

櫻町天皇の元文五年（徳川吉宗時代）に、比叡山の中腹にある西塔の釋迦堂の修理が行はれ、奉行には、近江の信樂の代官、多羅尾四郎左衛門と、大津の代官、石原清左衛門の二士が、徳川將軍の命を受けて勤めた。

右の石原清左衛門の組下の、木内兵左衛門と云ふ三十餘歳の人が、三月七日の暮方に彼等の本陣たる行榮院と云ふ寺から突然行衛が不明になり、いろ／＼と尋ねられたけれど踪跡が知れない、唯だ、履いて居た下駄が、寺の玄關前と内庭とに、片足づつ散らばつて居るのが發見されたので、奇怪なことだとして、大に搜索されたところ、寺内の辨天祠の傍に脇差が落ちて居たが、鞘は碎け、刀身は鍋の柄の如くに曲

り、また脇差に附屬した小刀は三片に折れて居り、又その附近には、禪が三ツに引ちぎられて落ちてゐたから、是は尋常ではない、屹度天狗の業に罹つたのだと斷定されて、大騒ぎになり、比叡山の魔所と云ふ魔所を残りなく大搜索し、一方では山内の寺々で祈禱を始めるなど、大事に及んだ。

スルと其夜の一時半頃の深夜に、西塔附近の空中にて、幅廣い非常な大音にて『頼まう／＼』と云ふ呼聲が五六聲續いたが、この音聲は大風の轟くやうで、人間の聲では無かつた。この折は大雨の降る最中で、山は尙ほ積雪が深く、月は落ちて、闇黒な夜であつたので、人々は物凄く動かなかつたが、獨り鈴木七郎と云ふのが、彼の呼聲を尋ねて釋迦堂の庭へ出て見ると、堂の棟の上に、翼形態の異形の者が立つて居て「恐ろしい、早く下してくれい」と叫ぶは人の聲である。

そこで七郎が「兵左衛門殿ではないか」と問ふて見ると、左様だと答へたので、空に透してよく見ると、翼と見へたのは破傘を半分披らさかけて雨を凌いで居るのであ